

授業科目	医学総論（公衆衛生・精神保健含む）				
担当者	板倉登志子・山本永人・吉機俊雄・松井理直・木村晃大・塩見千夏				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な医学的知識について学ぶ。

■ 到達目標

言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 専門基礎分野 基礎医学（木村）
- 第2回 専門基礎分野 基礎医学（木村）
- 第3回 専門基礎分野 音響学・音声学（松井）
- 第4回 専門基礎分野 社会保障制度・関係法規（山本）
- 第5回 専門基礎分野 社会保障制度・関係法規（山本）
- 第6回 専門基礎・専門分野 言語学 聴覚系（塩見）
- 第7回 専門基礎・専門分野 言語学 聴覚系（塩見）
- 第8回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉）
- 第9回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉）
- 第10回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第11回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第12回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第13回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第14回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第15回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）

■ 評価方法

筆記試験100% 2年間の履修科目の総復習
（国家試験と同形式の試験を2回実施、2回とも60%以上で合格とする。問題は五者択一形式）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

言語聴覚士過去問題を中心に分からないところを質問・確認し合って受験勉強を進めること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士テキスト
著者名：廣瀬肇 監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	解剖学				
担当者	柴田雅朗				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士を志す学生に必要なとなる解剖学の基礎を学ぶ。主に、神経系および呼吸器系を中心に解説し、要所でそれらを理解するための関連事項を解説する。

■ 到達目標

人体構造の基礎的知識を身につけ、分からないことは自ら調べ理解し、説明することが出来るようにする。

■ 授業計画

- 第1回 神経系の基礎：神経系の区分、神経細胞、シナプス、刺激の伝達方向、灰白質と白質、神経節、神経膠細胞、脳の発生
- 第2回 中枢神経系1：脊髄、腰椎穿刺、脳幹（中脳、橋、延髄）
- 第3回 中枢神経系2：間脳、大脳（溝と葉、島、機能局在、大脳辺縁系、パペッツ回路）
- 第4回 末梢神経系：脊髄神経、デルマトーム、自律神経（交感神経と副交感神経）、脳神経
- 第5回 脳室系：髄膜、脳脊髄液 脈管系：心臓から出入りする血管、大動脈弓から出る枝、胸大動脈と腹大動脈から出る枝、脳に分布する動脈、ウイリス動脈輪、頸動脈小体と頸動脈洞、脳梗塞で起こる疾患
- 第6回 鰓弓：鰓弓から形成される骨・軟骨、神経、筋、器官。 頭部の筋：表情筋、咀嚼筋 口腔：唾液腺、舌、咽頭
- 第7回 胚葉：三胚葉から形成される組織・器官 呼吸器系：鼻腔、副鼻腔、気管および気管支、肺
- 第8回 発声：喉頭、喉頭筋、声帯、支配神経 嚥下：嚥下に働く筋、支配神経

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業を受けた内容について、板書したノート、配布資料、教科書、ネッター解剖学アトラスを用いて、必ず復習を毎回行い、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ考えてみて、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

毎回、授業資料を配布しますが、随時、授業を聞きながら書き込みをして下さい。

授業科目	生理学				
担当者	宮井和政				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

生理学は人体の機能を学ぶ学問である。生理学の内容はかなり範囲が広く深いが、細胞の基本的な機能を概説したうえで、免疫系、循環器系、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、内分泌系について各器官系ごとに基本的な考え方や重点事項を厳選して学習する。

■ 到達目標

- ・人体の各器官系の基本的な機能が理解できる。
- ・人体の構造を学ぶ解剖学や疾患を学ぶ臨床医学との関連が理解できる。
- ・人体の各器官系の協調した働きを俯瞰的に理解できる。

■ 授業計画

- 第1回 細胞の構造と機能
- 第2回 血液（免疫系を含む）
- 第3回 心臓と循環
- 第4回 呼吸とガスの運搬
- 第5回 消化と吸収
- 第6回 尿の生成と排泄
- 第7回 酸塩基平衡
- 第8回 内分泌

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業の前に授業項目に該当する教科書の単元を予め通読（予習）しておくこと。また、授業後は各回に配布する小テストに解答できるように復習しておくこと。

■ 教 科 書

書 名： 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学（第5版）
 著者名： 岡田 隆夫・鈴木 敦子・長岡 正範
 出版社： 医学書院

■ 参考図書

書 名： トートラ人体解剖生理学 原書10版
 著者名： 佐伯 由香・細谷 安彦・高橋 研一・桑木 共之 編集／翻訳
 出版社： 丸善出版

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	病理学				
担当者	橋本和明				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

疾患がどのような原因・メカニズムで発症し、臓器・組織にどのような変化が生じ、どのような機能障害を呈するかという病理学の基礎を理解する。

■ 到達目標

病理学の基本を会得し、医学の専門用語と疾病の病態を理解する。

■ 授業計画

- 第1回 病因について
- 第2回 退行性病変・進行性病変について
- 第3回 代謝障害について
- 第4回 循環障害について
- 第5回 免疫について
- 第6回 炎症と感染症について
- 第7回 腫瘍について
- 第8回 老化・遺伝・先天異常・奇形について

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

他の講義・実習で学んだ疾患についても常に病理学的な視点も併せて理解してください。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 病理学 第4版
 著者名：梶原博毅・横井豊治・村雲芳樹
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	内科学（老年医学含む）				
担当者	藤岡重和・池田宗一郎・津田泰宏・下村裕章・瀧本忠司				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

循環器疾患、呼吸器疾患、消化器疾患、腎疾患、代謝性疾患、内分泌疾患、免疫、アレルギー疾患、血液疾患の代表的内科疾患について、その病因、病態、臨床像、検査・診断、治療、予後を学習する。また、内部障害を有する患者のリハビリテーション実施上の留意事項についても概説する。

■ 到達目標

1. 代表的内科疾患について、その病因、病態、臨床像、検査（画像、生理機能検査、血液検査を含む）と診断、治療、予後を説明できる。
2. 内部障害を有する患者のリハビリテーション実施上の留意事項を説明できる。

■ 授 業 計 画

第1回	内科学総論	内科診断学総論、内科治療学総論	藤岡
第2回	循環器疾患	(1) 高血圧、虚血性心疾患、動脈硬化	藤岡
第3回	循環器疾患	(2) 心臓弁膜症、先天性心疾患、心筋疾患	藤岡
第4回	循環器疾患	(3) 心不全、不整脈、その他	藤岡
第5回	呼吸器疾患	(1) 感染性肺疾患、アレルギー性肺疾患	池田
第6回	呼吸器疾患	(2) 慢性閉塞性肺疾患、間質性肺疾患、肺腫瘍	池田
第7回	消化器疾患	(1) 食道疾患、胃の疾患	津田
第8回	消化器疾患	(2) 小腸、大腸の疾患	津田
第9回	消化器疾患	(3) 肝疾患	津田
第10回	消化器疾患	(4) 胆道疾患、膵疾患、その他	津田
第11回	腎疾患	腎炎、腎不全、その他	下村
第12回	代謝性疾患	糖尿病、痛風、脂質異常症、メタボリックシンドローム	下村
第13回	内分泌疾患	下垂体疾患、甲状腺疾患、副腎疾患	瀧本
第14回	膠原病、アレルギー、免疫疾患	膠原病総論、アレルギー疾患総論、自己免疫疾患	瀧本
第15回	血液、造血器疾患	貧血、白血病、出血性疾患	瀧本

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

国家試験出題基準のに基づき、実地臨床に則した内容を中心に授業を展開します。事前学習として、シラバスに該当する各内科領域の解剖学、生理学、病理学を復習しておいてください。また、次回授業までに、前回の授業内容を各自ノートにまとめて十分に復習してください。疑問点については、各教員に質問し、説明をうけるようにして下さい。

■ 教 科 書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 内科学 第4版
 著者名：前田真治
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 老年学 第4版
著者名：大内尉義
出版社：医学書院

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

内科学を学習するにあたって、解剖学、生理学、病理学全般をよく理解しておく必要があります。各授業の前に、該当する領域の解剖学、生理学、病理学を十分に復習しておいてください。

授業科目	小児科学				
担 当 者	原田大輔				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

小児の成長、発達、形態的特徴、生理的特徴、よく見られる疾患・見逃せない疾患を中心とした小児の病気、発達障害、子ども虐待などについて、言語聴覚士国家試験の出題範囲と教科書に準拠した内容を意識して述べる。講義内で実際の症例を提示することで、小児診療を疑似体験できる。

■ 到達目標

小児の成長、発達、生理、病理上の特徴を把握する。
小児疾病、小児保健等を理解する。

■ 授 業 計 画

第1回 小児の成長と発達
第2回 小児保健
第3回 染色体異常と遺伝性疾患
第4回 新生児と周産期医学
第5回 神経疾患
第6回 筋疾患、骨系統疾患
第7回 消化器疾患
第8回 感染症
第9回 内分泌・代謝疾患
第10回 呼吸器疾患・免疫・アレルギー疾患・膠原病
第11回 腎・泌尿器疾患
第12回 血液腫瘍疾患
第13回 循環器疾患、眼科・耳鼻科疾患
第14回 心身症・神経症、発達障害学・障害児学
第15回 子ども虐待・不登校と子育て支援

■ 評価方法

筆記試験80%および授業中のレポート提出20%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的に教科書に準拠して講義するため、教科書を熟読すること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 小児科学・発達障害学 第3版
著者名：編集 宮尾益和／小沢浩
出版社：医学書院

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	精神医学				
担 当 者	高井田輪香子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

精神疾患の症状・診断基準・治療法について学ぶ

■ 到達目標

精神医学に関心を持ち、基本的な知識を身につける

■ 授業計画

第1回 精神医学総論 精神科医療の歴史と現状・精神障害の分類
 第2回 精神医学各論 神経症性障害・心身症
 第3回 精神医学各論 統合失調症・気分障害
 第4回 精神医学各論 認知症・てんかん
 第5回 精神医学各論 物質関連障害・嗜癖性障害
 第6回 精神医学各論 児童・青年期の精神障害
 第7回 精神医学各論 パーソナリティ障害・睡眠障害
 第8回 精神科の治療法・司法精神医学

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

可能な限り疾患ごとに事例を紹介しますので、授業用資料で症状や経過などを復習し、疾患への理解を深めてください。

■ 教科書

書 名：不要

■ 参考図書

書 名：改訂第2版 専門医がやさしく語る はじめての精神医学
 著者名：渡辺 雅幸
 出版社：中山書店

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	リハビリテーション医学				
担 当 者	本多知行・他				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

・言語聴覚療法に必要なリハ医学の基礎知識や対象疾患を理解し、臨床場面でリハアプローチを実践できるよう基礎的事項の習得を目標に講義する。

■ 到達目標

・言語聴覚療法に必要な医学の基礎知識とリハビリテーションの概要を理解しリハ対象患者の全体像を把握してアプローチできるような臨床的考え方ができるようになる

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーション医学の歴史を知り現在の考え方を身につける
- 第2回 障害とは何かを知り障害の階層性（ICIDH と ICF）とリハビリテーション医学領域を把握し評価の概念を知る
- 第3回 リハビリテーション医学における障害の評価1：（意識レベル・運動障害・感覚障害・高次脳機能障害など）
- 第4回 リハビリテーション医学における障害の評価2：（言語障害・知能障害・高次脳機能障害など）
- 第5回 リハビリテーション医学における障害の評価3：（高次脳機能障害など）
- 第6回 リハビリテーション医学における障害の評価4：（発達障害・心機能障害・呼吸機能障害・嚥下機能障害など）
- 第7回 リハビリテーション医学における障害の評価5：（歩行障害・ADL 評価・QOL 評価・障害者心理・臨床検査・画像診断など）
- 第8回 リハビリテーション医学におけるチーム医療と治療概念・職種内容、リスク管理などを知る
- 第9回 脳損傷（脳血管障害・頭部外傷など）による障害を理解しそのリハビリテーションの概要を述べることができる
- 第10回 神経筋疾患（筋萎縮性側索硬化症・パーキンソン病・脊髄小脳変性症・筋ジストロフィー症など）の障害を理解しそのリハビリテーションの概要を述べることができる1
- 第11回 神経筋疾患（筋萎縮性側索硬化症・パーキンソン病・脊髄小脳変性症・筋ジストロフィー症など）の障害を理解しそのリハビリテーションの概要を述べることができる2
- 第12回 脊髄損傷（発症機転や麻痺の広がりなど）の障害を理解しそのリハビリテーションの概要を述べることができる
- 第13回 小児（特に脳性麻痺）疾患・骨関節疾患（整形外科的疾患など）・切断の障害を理解し、そのリハビリテーションの概要を述べることができる
- 第14回 循環器・呼吸器疾患（心筋梗塞や慢性閉塞性肺疾患など）・認知症などの障害を理解しそのリハビリテーションの概要を述べることができる
- 第15回 認知症の疾患や高齢者の特徴などを知りこれらの障害の理解とそのリハビリテーションの概要を述べることができる

■ 評価方法

筆記試験60% レポート（2回）40%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

レポートは宿題としますが、教科書を見ずに授業を学んでの自分なりの意見をしっかりと記載のこと

■ 教科書

書 名：見て知るリハビリテーション医学
著者名：柳澤信夫監修・小松泰善編集
出版社：丸善出版

■ 参考図書

書 名：リハビリテーション医学テキスト（改定第4版）
著者名：三上真弘監修・出江紳一・加賀谷齊編集
出版社：南江堂

■ 留意事項

全て遠隔授業（オンデマンド）で実施。
新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	耳鼻咽喉科学				
担 当 者	藤木暢也・岡野高之・山本秀文・阪本浩一				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

耳鼻咽喉科領域の各器官の解剖・機能を知ると共に、その病態と治療について講義を行う

■ 到達目標

耳鼻咽喉科領域の各器官について、解剖・機能を説明できる。代表的な疾患について、その病態と治療の概略を知る。

■ 授 業 計 画

- 第1回 耳鼻咽喉科・頭頸部外科学総論 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖(1)(藤木)
- 第2回 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖(2)(藤木)
- 第3回 鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療(1)(藤木)
- 第4回 鼻・咽喉頭・頸部疾患の病態と治療(2)(藤木)
- 第5回 側頭骨の解剖と生理(外耳・中耳)(岡野)
- 第6回 聴覚伝導路(内耳・中枢聴覚伝導路)(岡野)
- 第7回 中耳・外耳疾患とその治療 1(岡野)
- 第8回 中耳・外耳疾患とその治療 2(岡野)
- 第9回 内耳の解剖・機能(山本)
- 第10回 平衡機能検査(山本)
- 第11回 めまい疾患 各論1(山本)
- 第12回 めまい疾患 各論2(山本)
- 第13回 遺伝性難聴その分類と診断(阪本)
- 第14回 乳幼児の難聴：滲出中耳炎からウイルス性難聴まで(阪本)
- 第15回 新生児スクリーニング後の耳鼻咽喉科医の関わり：精密検査からその後の経過観察まで(阪本)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

毎回の授業後には、各自にて復習し、理解を深めておくこと。解剖は図示して復習するのが望ましい。

■ 教 科 書

書 名：Success 耳鼻咽喉科第2版
 著者名：洲崎春海 鈴木衛 吉原俊雄
 出版社：金原出版

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態(災害等)が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム(Moodle)を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

講義および、国家試験問題をスモールグループでディスカッションしながら回答しプレゼンテーションする形式を採っています。活発に意見を出し合うことで理解が深まることを期待します。

授業科目	臨床神経学				
担当者	小倉光博				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

スライドを中心に、臨床的に頻度の高い神経疾患を分かりやすく説明する。あわせて、神経解剖、神経性生理、神経症候学、神経放射線診断についても解説する。

■ 到達目標

神経解剖、神経生理などの基本的知識をもとに、臨床でよく経験する神経疾患の病態、診断、治療を理解すること。

■ 授業計画

- 第1回 神経解剖・神経生理 (1)
- 第2回 神経解剖・神経生理 (2)
- 第3回 神経症候学
- 第4回 脳血管障害 (1)
- 第5回 脳血管障害 (2)
- 第6回 パーキンソン病 (1)
- 第7回 パーキンソン病 (2)
- 第8回 神経変性疾患
- 第9回 感染性疾患
- 第10回 認知症 (1)
- 第11回 認知症 (2)
- 第12回 頭部外傷
- 第13回 脳腫瘍
- 第14回 神経画像 (1)
- 第15回 神経画像 (2)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業復習をし、分からないところは次回の授業で積極的に質問すること。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：ビジュアル臨床神経学
 著者名：永井知代子著
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

--

授業科目	形成外科学				
担 当 者	横田祐介				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

顔面の解剖、口唇裂・口蓋裂の治療
口蓋裂構音障害のメカニズム
顎変形症の病態と治療
口腔がんの治療と再建

■ 到達目標

口唇裂・口蓋裂の治療を知り、口蓋裂構音障害の実態が理解できる
口腔顔面の構造を知り、顔の変形やその再建法などを理解できる

■ 授業計画

第1回 顔面の構造と解剖
第2回 口唇裂・口蓋裂
第3回 顎変形症
第4回 唾液腺の機能と構造
第5回 口腔がんの治療
第6回 顎顔面の再建
第7回 試験対策
第8回 試験対策

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜講義中に指示をする。

■ 教 科 書

■ 参考図書

書 名：のどちんこの話
著者名：古郷幹彦
出版社：医歯薬出版
.....
書 名：口蓋裂・構音障害
著者名：武内和弘・福田登美子・西尾順太郎・糟谷政代・磯野信策・峪 道代・山崎祥子・山本悠子
出版社：協同医書出版

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	臨床歯科医学				
担当者	山西整				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な歯科の知識について学ぶ。

■ 到達目標

歯科の知識の習得と理解

■ 授業計画

- 第1回 歯科概論
歯と歯周組織について（発生、構造と機能）
- 第2回 歯と歯周組織について 1
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損）
- 第3回 歯と歯周組織について 2
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周炎、歯列不正、歯の欠損）
- 第4回 口腔、顎、顔面について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第5回 顎関節、唾液腺について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第6回 口腔ケアについて
歯科医学的処置（補綴、保存、歯科矯正など）について
- 第7回 口蓋裂治療と ST
- 第8回 口蓋裂治療と ST

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、疑問点は次回の講義で質問をすること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道健一
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	口腔外科学				
担当者	森田章介				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

口腔・顎・顔面の構造と機能および口腔・顎・顔面領域の疾患・治療について講義を行う。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要な口腔・顎・顔面の構造および口腔・顎・顔面領域の疾患・治療について理解する。

■ 授業計画

- 第1回 口腔外科学総論：口腔外科疾患およびそれらの診断と治療法、口腔・顎・顔面領域の先天異常
- 第2回 口腔・顎・顔面領域の先天異常、発育異常（後天異常）
- 第3回 口腔・顎・顔面領域の炎症性疾患、口腔粘膜疾患
- 第4回 口腔・顎・顔面領域の損傷、顎関節疾患
- 第5回 口腔・顎・顔面領域の嚢胞性疾患、唾液腺疾患、神経疾患
- 第6回 口腔・顎・顔面領域の腫瘍および腫瘍類似疾患
- 第7回 口腔・顎・顔面領域の腫瘍および腫瘍類似疾患、口腔・顎・顔面領域の手術と機能回復
- 第8回 口腔・顎・顔面領域の手術と機能回復、試験と解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

シラバスを参考に授業範囲を予習してください。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学 器質性構音障害
 著者名：道 健一 今井智子 高橋浩二 山下夕香里
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：最新口腔外科学 第5版（2021年3月20日発行）
 著者名：榎本昭二 道 健一 天笠光雄 小村 健 監修
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	呼吸発声系医学（呼吸発声発語系の構造、機能、病態）				
担 当 者	本多知行・他				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

嚥下障害分野：嚥下障害の臨床に必要な医学的知識および支援のあり方について学ぶ。（本多）
 音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。（講師非公表）

■ 到達目標

嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」という QOL の向上を目的として、言語聴覚士が支援できる技術と考え方を習得する。（本多）
 音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。（講師非公表）

■ 授 業 計 画

第1回 嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理（本多）
 第2回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練1（本多）
 第3回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練2（本多）
 第4回 嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項（本多）
 第5回 偽（仮）性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ（本多）
 球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
 第6回 変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ（本多）
 第7回 嚥下障害の重症度分類と最近の話題（本多）
 第8回 呼吸器の解剖（講師非公表）
 第9回 喉頭の解剖（講師非公表）
 第10回 発声の仕組み（講師非公表）
 第11回 喉頭の検査（講師非公表）
 第12回 音声外科の手術法（講師非公表）
 第13回 音声障害をきたす重要な疾患の診断と治療：声帯粘膜の異常など（講師非公表）
 第14回 音声障害をきたす重要な疾患の診断と治療：腫瘍性病変など（講師非公表）
 第15回 音声障害をきたす重要な疾患の診断と治療：神経性疾患など（講師非公表）

■ 評 価 方 法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内容を、教科書と配布資料をもとにして復習しておいてください。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための音声障害学
 著者名：大森孝一
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：「摂食・嚥下リハビリテーション」第2版

著者名：金子芳洋、千野直一監修

出版社：医歯薬出版

書 名：「嚥下障害の臨床」第2版

著者名：日本嚥下障害臨床研究会監修

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	聴覚系医学（聴覚系の構造、機能、病態）				
担当者	金丸眞一				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 到達目標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 耳科学の概説と聴覚系の構造①（外耳・中耳・内耳）
- 第2回 聴覚系の機能①（外耳・中耳）
- 第3回 聴覚系の機能②（内耳）
- 第4回 聴覚系の機能③（聴神経と視聴中枢経路）
- 第5回 聴覚系の機能④（聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚）
- 第6回 聴覚検査と耳疾患
- 第7回 聴覚器官の病態①（外耳・中耳疾患①）
- 第8回 聴覚器官の病態②（外耳・中耳疾患②）
- 第9回 鼓室形成手術
- 第10回 聴覚器官の病態③（内耳疾患①）
- 第11回 聴覚器官の病態④（内耳疾患②）
- 第12回 内耳再生医学
- 第13回 聴覚器官の病態⑤（後迷路・中枢性難聴疾患）
- 第14回 聴覚と音声・言語・音楽
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、分からないことは随時授業内で質問すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための聴覚障害学
 著者名：喜多村健 編著
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	神経系医学（神経系の構造、機能、病態）				
担当者	宮井和政				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

神経系は、感覚の受容、情報の処理、効果器への指令を行う器官系であり、環境の変化に応じた反応を引き起こすために欠かせない情報伝達を担う。神経系は機能が部位ごとに異なり（機能局在）、その部位ごとが決まった経路で連絡している（伝導路）ので、神経系の働きと病態を理解するためには、主な機能局在と伝導路を把握する必要がある。この授業では、機能局在と伝導路に主眼を置いて、中枢神経系と末梢神経系の基本的な構造と機能について病態とも関連させて学習する。

■ 到達目標

- ・神経細胞の形態と情報伝達のしくみを理解できる。
- ・脳と脊髄の構造と機能、および主要な伝導路を理解できる。
- ・脳神経、脊髄神経、自律神経系の構造と機能を理解できる。
- ・中枢および末梢神経系の病態と検査の概要を理解できる。

■ 授業計画

- 第1回 神経組織・神経伝導のしくみ
- 第2回 神経系の概要と分類
- 第3回 脊髄の構造と機能
- 第4回 脳幹の構造と機能
- 第5回 間脳の構造と機能
- 第6回 小脳および大脳基底核の構造と機能
- 第7回 大脳辺縁系の構造と機能
- 第8回 大脳皮質の構造と機能
- 第9回 伝導路
- 第10回 脳血液循環と脳脊髄液
- 第11回 脳神経の構造と機能（1）
- 第12回 脳神経の構造と機能（2）
- 第13回 脊髄神経の構造と機能
- 第14回 自律神経系の構造と機能
- 第15回 中枢／末梢神経系の病態と画像検査

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業の前に授業項目に該当する教科書の単元を予め通読（予習）しておくこと。また、授業後は各回に配布する小テストに解答できるように復習しておくこと。

■ 教科書

書 名：絵でみる脳と神経 しくみと障害のメカニズム（第4版）
 著者名：馬場 元毅
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：ブルーメンフェルト カラー神経解剖学 - 臨床例と画像鑑別診断 -
著者名：ハル・ブルーメンフェルト（安原治 訳）
出版社：西村書店

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床心理学Ⅰ（理論と分類）				
担当者	藤井章乃				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学についての人格理論、発達理論、心理アセスメント、心理療法を学び、その内容に基づいた実習や感受性トレーニングを行うことで自己理解、他者理解を深め、対人援助について具体的に考察する。

■ 到達目標

自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考え、対人援助が実践できるようになっていくことを目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 臨床心理学とは何か
- 第2回 心とは何か
- 第3回 人格理論 フロイトⅠ
- 第4回 人格理論 フロイトⅡ
- 第5回 人格理論 ユングⅠ
- 第6回 人格理論 ユングⅡ
- 第7回 人格理論 ロジャーズ
- 第8回 人格理論 エリクソン
- 第9回 発達理論 マーラー・ウィニコット他
- 第10回 フロイト以降
- 第11回 精神医学 実習
- 第12回 精神医学
- 第13回 パーソナリティ理論
- 第14回 心理アセスメント
- 第15回 心理テスト 質問紙法

■ 評価方法

筆記試験70% 授業後の振り返りの感想30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内で適宜指示をする。

■ 教科書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕 松本真理子 松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	臨床心理学Ⅱ（査定と心理療法）				
担当者	藤井章乃				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

前期に引き続き、臨床心理学についての人格理論、発達理論、心理アセスメント、心理療法を学び、その内容に基づいた実習や感受性トレーニングを行うことで自己理解、他者理解を深め、対人援助について具体的に考察する。

■ 到達目標

前期に引き続き、自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考え、対人援助が実践できるようになっていくことを目標とする。

■ 授 業 計 画

第1回 心理テスト 質問紙法 実習
 第2回 心理テスト 投影法
 第3回 心理テスト 投影法 実習
 第4回 心理テスト その他
 第5回 心理療法 クライエント中心療法
 第6回 傾聴訓練
 第7回 精神分析療法
 第8回 分析的心理療法
 第9回 芸術療法
 第10回 芸術療法 実習
 第11回 森田療法 家族療法
 第12回 行動療法
 第13回 自律訓練法
 第14回 認知行動療法
 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験70%、授業の振り返りとして感想30%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

■ 教 科 書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕 松本真理子 松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	生涯発達心理学Ⅰ（乳幼児期）				
担当者	岡崎満希子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

発達とは、誕生から死に至るまでの個体の一連の変化であり、それは環境との相互作用によって成される。本講義では、そのような発達観に基づいて、主に乳幼児期について学んでいく。発達心理学に関する諸理論のみならず、近年の発達科学研究の動向についても触れる。

■ 到達目標

乳幼児期の発達の流れを大まかに掴むことと、各領域でポイントになる項目の理解を目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 発達とは
- 第2回 発達を規定するもの（1）
- 第3回 発達を規定するもの（2）
- 第4回 認知発達の基礎（1） 新生児期の発達、乳児研究の方法
- 第5回 認知発達の基礎（2） 乳児期
- 第6回 認知発達の基礎（3） 幼児期
- 第7回 他者との関係性の発達（1） 乳児期
- 第8回 他者との関係性の発達（2） 幼児期
- 第9回 自己認識の発達
- 第10回 まとめ
- 第11回 発達理論（1）
- 第12回 発達理論（2）
- 第13回 近年の発達科学研究の動向
- 第14回 児童虐待について
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

特に重要な点については、その都度指示をしますので、毎回ノートに整理し復習するようにしてください。

■ 教科書

書 名：生涯発達心理学 認知・対人関係・自己から読み解く
 著者名：鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ
 出版社：有斐閣アルマ

■ 参考図書

書 名：生涯発達心理学
 著者名：西村純一・平野真理 編
 出版社：ナカニシヤ出版

書 名：よくわかる発達心理学第2版
 著者名：無藤隆、岡本裕子、大坪治彦 編
 出版社：ミネルバ書房

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

発達心理学は、言語発達の基礎であるとともに、関連する臨床の礎となります。しっかりと取り組んでください。

授業科目	生涯発達心理学Ⅱ（幼児期～老年期）				
担当者	森田喜治・森定美也子 他				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ボウルビーのライフサイクルを中心に生涯発達の課題について、講義しその時期ごとにみられる子どもの心理的問題、精神的問題にも目を向けることによって、生涯発達における人間の発達を概観する。特に、受講者の自己の過去の経験を見直しつつ、体験的に人間の生涯発達を理解する。（森田）
- ・老年期のエイジングとパーソナリティー、認知症の問題、死への対応について解説する。老年期のエイジングとパーソナリティーについて理解を深め、ST が如何に対応すべきかを学んで頂きたい。（森定 他）

■ 到達目標

- ・①ボウルビーの述べる発達課題について理解する ②各課題を経過する上で我々は様々な問題を通過する。それらの問題の形成を知ることで、人が成長することの難しさと、それ故に表現される心の叫びの理解 ③発達課題を通過してきた受講者自身の体験を通して、生涯発達の理解を深める ④言語、聴覚の障がいとされるコミュニケーションのハンディがもたらす心の叫びの理解（森田）
- ・各発達段階の課題や病理について理解し、適切なアプローチについて考えることが出来る（森定 他）

■ 授 業 計 画

- 第1回 精神分析学の観点から母子関係を主体にした発達について（森田）
- 第2回 ボウルビーの発達課題を中心にして幼児期の発達課題及び心理学的問題（森田）
- 第3回 ボウルビーの発達課題を中心にして児童期の発達課題及び心理学的問題（森田）
- 第4回 児童期の発達課題及び心理学的問題（特に虐待と学校における問題）（森田）
- 第5回 ボウルビーの発達課題を中心にして思春期の発達課題及び心理学的問題（森田）
- 第6回 思春期の発達課題及び心理学的問題（思春期の不安定と精神的問題）（森田）
- 第7回 ボウルビーの発達課題を中心にして成人期～壮年期の発達課題及び心理学的問題（森田）
- 第8回 成人期～壮年期の発達課題及び心理学的問題（家族の関わりと壮年期の心理的問題）（森田）
- 第9回 老年期の位置づけとコミュニケーションの基本（森定）
- 第10回 老年期の課題とコミュニケーション方法 - 認知症の特徴と対応について-①（森定）
- 第11回 老年期の課題とコミュニケーション方法 - 認知症の特徴と対応について-②（森定）
- 第12回 老年期の方へコミュニケーション方法 - 老人保健施設での集団療法、回想法、コラージュ療法-③（森定）
- 第13回 老年期の方へコミュニケーション方法 - 老人保健施設での集団療法、回想法、コラージュ療法-④（森定）
- 第14回 死への対応1（講師非公表）
- 第15回 死への対応2（講師非公表）

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

森田：発達というのは、概念的なものではなく、そこにはそれぞれが過去に通過してきた哲学がある。したがって、人に関する、あるいは、発達と心のありように関する様々な書物に触れながら、自分に目を向けるように心がける。本講義の課題であるレポートはそれぞれの自己に対する振り返りになるため、その際にどのような気づきを得たかが中心になるため、レポートの中ではその書物を参考にできるようにしていただきます。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

講義に当たって、積極的に参加するようにしてください。講義中でも質問等がありましたら出していなければ活発になるものと思われます。授業ではなく講義であるということです。業を授けるのではなく、自ら学ぶように心がけてください。

授業科目	学習・認知心理学Ⅰ（感覚・知覚・学習・記憶）				
担当者	小林穂波				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学の諸分野について解説する。前期は「感覚」「知覚・認知」「学習」「記憶」「対人認知」に関する内容を扱う。本講義では日常生活で身近に見られる例を多く紹介し、私たちの普段の行動（本を読む・人と話す・自転車に乗る…）がどのような認知機能に支えられているのか、理解を深める。

■ 到達目標

- (1) 人間の感覚・知覚・認知過程について概要を理解し、心理学の用語を用いてわかりやすく説明できるようになる。
- (2) 講義で扱った主要な概念・用語について理解し、心理学になじみがない人に対してもわかりやすく説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 認知心理学とは / 感覚 (1) : 感覚の種類・感覚可能範囲と感度・物理量と心理量
- 第2回 感覚 (2) : 網膜と視知覚 / 色彩の知覚
- 第3回 知覚・認知 (1) : 空間知覚 / 形の知覚 / 運動知覚
- 第4回 知覚・認知 (2) : 知覚の恒常性・知覚の統合と相互作用・知覚運動協応
- 第5回 知覚・認知 (3) : 注意・オブジェクト認知
- 第6回 対人認知: 印象形成 / 対人魅力 / ステレオタイプ / 認知的不協和
- 第7回 記憶 (1) : 記憶の過程と分類
- 第8回 記憶 (2) : 短期記憶とワーキングメモリ
- 第9回 記憶 (3) : 長期記憶
- 第10回 記憶 (4) : 記憶の検索と忘却・記憶の歪み
- 第11回 学習 (1) : 古典的条件づけ
- 第12回 学習 (2) : オペラント条件づけ
- 第13回 学習 (3) : 様々な学習 (弁別学習・技能学習・社会的学習)
- 第14回 学習 (4) : 動機づけ
- 第15回 認知心理学の歴史と方法論 / 前期のまとめ

■ 評価方法

毎回の小レポート: 10% 期末試験: 90%
 入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあります。評価方法を変更する場合には、科目担当者より別途連絡します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに読み直して復習しておくこと。次週までに目を通しておくべき教科書の範囲は、毎回の講義で指定する。参考図書の該当部分もあわせて読んでおくことが望ましい。

■ 教 科 書

書 名: 心理学 (第5版)
 著者名: 鹿取 廣人, 杉本 敏夫, 鳥居 修晃
 出版社: 東京大学出版会

■ 参考図書

書 名：グラフィック認知心理学
著者名：森敏昭・井上毅・松井孝雄
出版社：サイエンス社

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

受講生の要望や関心に合わせて講義内容を多少変更することがあります。本講義の内容に関する質問や要望は、小レポートの自由記述欄・メール等で伝えてください。

授業科目	学習・認知心理学Ⅱ（思考・言語）				
担当者	小林穂波				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学の諸分野について解説する。後期は「思考・知識」「言語」に関する内容を扱う。本講義では日常生活で身近に見られる例を多く紹介し、私たちの普段の行動（本を読む・人と話す・自転車に乗る…）がどのような認知機能に支えられているのか、理解を深める。

■ 到達目標

- (1) 人間の感覚・知覚・認知過程について概要を理解し、心理学の用語を用いてわかりやすく説明できるようになる。
- (2) 講義で扱った主要な概念・用語について理解し、心理学になじみがない人に対してもわかりやすく説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 前期の復習 / 後期のオリエンテーション
- 第2回 思考・知識(1) : 知識の構造 / 概念
- 第3回 思考・知識(2) : 問題解決 / 推論
- 第4回 思考・知識(3) : 認知バイアス / 表象
- 第5回 言語(1) : 言語の特徴 / 非言語的コミュニケーション
- 第6回 言語(2) : 言語理解と産出
- 第7回 言語(3) : 言語使用と知識
- 第8回 学習・認知心理学Ⅰ・Ⅱのまとめ

■ 評価方法

毎回の小レポート : 10% 期末試験 : 90%

入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあります。評価方法を変更する場合には、科目担当者より別途連絡します。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに読み直して復習しておくこと。次週までに目を通しておくべき教科書の範囲は、毎回の講義で指定する。参考図書の該当部分もあわせて読んでおくことが望ましい。

■ 教 科 書

書 名 : 心理学 (第5版)
著者名 : 鹿取 廣人, 杉本 敏夫, 鳥居 修晃
出版社 : 東京大学出版会

■ 参考図書

書 名 : グラフィック認知心理学
著者名 : 森敏昭・井上毅・松井孝雄
出版社 : サイエンス社

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

受講生の要望や関心に合わせて講義内容を多少変更することがあります。本講義の内容に関する質問や要望は、小レポートの自由記述欄・メール等で伝えてください。

授業科目	心理測定法				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、人間の心理を客観的に把握する方法の必要性を理解するための基本的な内容を解説します。

■ 到達目標

言語聴覚士が臨床現場で用いている各種検査方法がどのような基盤を持っているのか、検査結果のデータを正しく処理するために必要なことは何かを正しく理解できるようになることを目指します。

■ 授業計画

- 第1回 測定と尺度
- 第2回 代表値・散布度・相関度
- 第3回 信頼性と妥当性
- 第4回 精神物理学的手法：調整法と極限法
- 第5回 精神物理学的手法：適応法・恒常法
- 第6回 評定法など、その他の心理実験手法
- 第7回 投影法とその問題点
- 第8回 精神物理学関数：Weber の法則
- 第9回 精神物理学関数：Fechner の法則
- 第10回 精神物理学関数：Stevens のべき法則
- 第11回 信号検出理論
- 第12回 判断の確からしさの指標
- 第13回 正規分布について
- 第14回 統計学の基礎
- 第15回 実験計画法の基本

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は 90 分程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：プリントと web 教材を用います

■ 参考図書

書 名：授業中に指定する。

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

国試対策という観点からいうと、心理測定法は基本的に暗記科目です。必要事項を授業中にきちんと暗記しておくようにしてください。

授業科目	言語学Ⅰ（音声学・形態論）				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語音声・音韻の特徴を詳細に解説します。

■ 到達目標

日本語の音声・音韻について習熟し、構音障害などを分析できる知識を身につけることを目指します。

■ 授業計画

- 第1回 言語学・音声学の基礎
- 第2回 記号の哲学的性質
- 第3回 調音の基本
- 第4回 調音位置と調音方法
- 第5回 国際音声記号の基本
- 第6回 国際音声記号と ST が用いる発音記号の相違点と注意点
- 第7回 日本語分節音の基本
- 第8回 日本語の母音
- 第9回 日本語の子音：共鳴音
- 第10回 日本語の子音：阻害音
- 第11回 分節音の構造：モーラと音節
- 第12回 日本語の音調について
- 第13回 日本語諸方言のアクセント
- 第14回 音声学と音韻論
- 第15回 日本語音韻論の例

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は90分程度。復習時間は個人の理解度によるが、1時間程度。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識「音声学・言語学」第2版
 著者名：今泉敏（編）
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：日本語音声学入門
 著者名：斎藤純男
 出版社：三省堂

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

対面授業の場合、事前に web 上で予習を行い、対面授業中は質疑応答を行うという形の反転授業を用いることがあります。

授業科目	言語学Ⅱ（音響音声学・聴覚心理学）				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語の文字・形態素・文法、意味の性質について詳細な解説を行います。

■ 到達目標

日本語の形態現象・文法・意味について習熟し、各種言語障害を分析・理解する基礎的能力の涵養を目指します。

■ 授業計画

- 第1回 日本語における各種文字の基本
- 第2回 漢字とかな文字の関係
- 第3回 形態素の導入
- 第4回 異形態と形態素の分類
- 第5回 形態素と語
- 第6回 合成語の性質
- 第7回 形態素と語種
- 第8回 連濁について
- 第9回 動詞後続形態素の性質
- 第10回 いわゆる「間違った」日本語の表現について
- 第11回 統語論の基礎
- 第12回 意味論の基礎
- 第13回 格助詞の機能
- 第14回 自動詞と他動詞の項構造
- 第15回 動詞後続形態素の意味

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は 90 分程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識「音声学・言語学」第2版
 著者名：今泉敏（編）
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：授業中に指定します

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

対面授業の場合、事前に web 上で予習を行い、対面授業中は質疑応答を行うという形の反転授業を用いることがあります。

授業科目	音声学				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声学・音韻論・言語学・音響学の知識を統合し、ことばについての理解を深めます。

■ 到達目標

1年生の時に勉強した音声学・音韻論・言語学・音響学の知識を統合し、言語障害・構音障害・聴覚障害を理解するための基礎的知識の完成を目指します。

■ 授業計画

- 第1回 記号としてのことばの復習
- 第2回 音声学の復習：発音記号の注意点
- 第3回 音声学の復習：発声および調音位置について
- 第4回 音声学の復習：調音方法について
- 第5回 音響学の復習：音源フィルタ理論と共鳴
- 第6回 母音の調音と音響学
- 第7回 接近音の調音と音響学
- 第8回 歯擦音の調音と音響学
- 第9回 ハ行子音の調音と音響学
- 第10回 破裂音の発声と音響学
- 第11回 破裂音の調音位置と音響学
- 第12回 日本語の無声化と音響学
- 第13回 撥音・促音・長音・モーラ・音節と音響学
- 第14回 アクセントとイントネーションの復習
- 第15回 日本語の音調と音響学
- 第16回 音声知覚様式：連続的知覚・範疇的知覚・聴覚バッファ
- 第17回 音声学と音韻論
- 第18回 文字・語種に関する復習
- 第19回 形態素に関する復習
- 第20回 日本語の合成語に関する復習
- 第21回 動詞後続形態素とその意味
- 第22回 日本語における語用論の基礎
- 第23回 社会言語学の基礎
- 第24回 日本語音声学・日本語言語学の全体像
- 第25回 国家試験問題の解説：音声学 (1)
- 第26回 国家試験問題の解説：音声学 (2)
- 第27回 国家試験問題の解説：言語学 (1)
- 第28回 国家試験問題の解説：言語学 (2)
- 第29回 国家試験問題の解説：音響学
- 第30回 音声学・言語学・音響学のまとめ

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は2時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1時間程度。また、初回の授業までに、1年生で学んだ「言語学」「構音障害」の内容をよく復習しておいてください。

■ 教科書

書 名：昨年度購入の教科書を用います（言語聴覚士のための基礎知識「音声学・言語学」第2版）

■ 参考図書

書 名：日本語音声学入門
著者名：斎藤純男
出版社：三省堂

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

初回の授業までに、1年生で学んだ「言語学」「構音障害」の内容をよく復習しておいてください。また6月中旬までに、言語聴覚士国家試験の過去問題をなるべくたくさん解いておいてください。

授業科目	音響学Ⅰ（一般音響学）				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

音の周波数・強さと音圧という物理的性質について詳細な解説を行います。

■ 到達目標

波数・波長の計算、dB の計算方法とその意味することに精通し、聴覚障害および補聴器や人工内耳の物理学的性質を正しく説明できる能力の涵養を目指します。

■ 授業計画

- 第1回 音とは何か
- 第2回 振動の伝播と原波形表示
- 第3回 音の4要素
- 第4回 疎密波の大局的な振動スピード
- 第5回 周波数・周期・波長
- 第6回 周波数と周波数レベル
- 第7回 ドップラー効果について
- 第8回 音の強さと音圧
- 第9回 レベルという概念の重要性
- 第10回 パワーレベル B 値の定義
- 第11回 B, dB の計算方法
- 第12回 強さレベルと音圧レベル
- 第13回 聴力レベルの考え方
- 第14回 感覚レベルと音の大きさの心理量
- 第15回 レベル概念と精神物理学的関数

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は 90 分程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：プリントと web 教材を用います。

■ 参考図書

書 名：授業中に指定します。

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

対面授業の場合、事前に web 上で予習を行い、対面授業中は質疑応答を行うという形の反転授業を用いることがあります。

授業科目	音響学Ⅱ（音響音声学・聴覚心理学）				
担当者	松井理直				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声の音響的特徴について詳細な解説を行います。

■ 到達目標

日本語音声のフォルマントをはじめとした音響特性について正しく理解し、構音障害の客観的な分析能力や、補聴器・人工内耳の設定に必要な基礎的知識の涵養を目指します。

■ 授業計画

- 第1回 音の持続時間と心理的影響について
- 第2回 純音と複合音
- 第3回 音のスペクトル
- 第4回 スペクトル包絡線と音色の関係
- 第5回 共鳴
- 第6回 音響音声学：声帯振動の特徴
- 第7回 音響音声学：調音と共鳴
- 第8回 閉管の音響特性
- 第9回 開管の音響特性
- 第10回 日本語5母音のフォルマント
- 第11回 接近音の音響特性：フォルマントローカスとフォルマント遷移
- 第12回 摩擦音の特徴
- 第13回 有声性と Voice Onset Time
- 第14回 破裂音の音響特性
- 第15回 音響音声学のまとめ

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間は 90 分程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：プリントと web 教材を用います

■ 参考図書

書 名：授業中に指定します

■ 留意事項

質問などは大歓迎です。授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をするようにしてください。新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

対面授業の場合、事前に web 上で予習を行い、対面授業中は質疑応答を行うという形の反転授業を用いることがあります。

授業科目	言語発達学				
担 当 者	岡崎満希子・川畑武義				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

ヒトはどのようにして、ことばを獲得していくのか。主な言語発達理論と、言語発達を支える基盤について学んだ上で、子どもがことばを話し始めるまでの道筋を理解していく。(岡崎)
 幼児期から学童期の各発達段階における語彙・構文・会話・読み書き能力を含む言語発達の様相について学ぶ。(川畑)

■ 到達目標

- ・ことばが出るまでの成り立ちを理解し、説明できる。(岡崎)
- ・幼児期から学童期の言語発達の様相および言語獲得過程について基礎知識を習得する。(川畑)

■ 授業計画

- 第1回 言語発達理論 (岡崎)
- 第2回 言語発達を支える発達の基盤 (岡崎)
- 第3回 前言語期の発達 (1) (岡崎)
- 第4回 前言語期の発達 (2) (岡崎)
- 第5回 象徴機能の発達 (岡崎)
- 第6回 語彙の獲得 (岡崎)
- 第7回 語彙獲得を説明する理論 (岡崎)
- 第8回 まとめ、象徴機能の発達評価 (岡崎)
- 第9回 幼児期の言語発達 語彙・構文の発達① (川畑)
- 第10回 幼児期の言語発達 語彙・構文の発達② (川畑)
- 第11回 幼児期の言語発達 語彙・構文の発達③ (川畑)
- 第12回 会話能力の発達① (川畑)
- 第13回 読み書きの発達② (川畑)
- 第14回 子どもの「見る」「聞く」の発達 (川畑)
- 第15回 まとめ 前言語期～読み書きの発達 (川畑)

■ 評価方法

筆記試験100%、授業態度を考慮する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適時授業中に指示をする。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害 第3版
 著者名：藤田郁代 監修
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 音声学・言語学 第2版

著者名：編集 今泉敏

出版社：医学書院

書 名：よくわかる言語発達 改訂新版

著者名：岩立志津夫・小椋たみ子

出版社：ミネルバ書房

書 名：認知発達治療の実践マニュアルー自閉症の Stage 別発達課題（自閉症治療の到達点2）

著者名：太田昌孝、永井洋子

出版社：日本文化科学社

書 名：乳幼児精神発達診断法0才～3才まで

著者名：津守真・稲毛教子

出版社：大日本図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

言語発達障害を理解する上で基礎となる学問領域です。しっかり学んでください。

授業科目	リハビリテーション概論				
担 当 者	大西環・大根茂夫・川畑武義				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・リハビリテーションの概要についての講義と言語聴覚障害の方との対話会を行う。

■ 到達目標

- ・リハビリテーションの考え方について知る。言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深め、コミュニケーションに関する自己の課題を知る。言語聴覚障害の方との対話を通じて、リハビリテーションへの取り組みや生活の実際を知る。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションとは
リハビリテーションの考え方とその概要
- 第2回 対話会の実施にあたって
対話会の意義と取り組むべき課題について
- 第3回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第4回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第5回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第6回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第7回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第8回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・グループで対話会の準備を行う。また、終了後は対話会のビデオを見ながらレポートを作成する。
- ・参加される方の時代背景（戦前・前後、それ以降）について調べておくこと。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	社会保障制度				
担当者	山本永人				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な社会保障制度を社会福祉学のエッセンスも取り入れながら概説する。

■ 到達目標

社会保険制度と公的扶助、社会福祉サービスの概略が説明できる。
 社会福祉サービスの理念や ICF について説明ができる。
 我が国の社会保障制度の展望や課題について自分の意見を言うことができる。
 統合モデルに則した障害の捉え方ができる。

■ 授業計画

- 第1回 社会保障制度と社会福祉サービスの関係性
- 第2回 障害者福祉サービスの基本的理念（ノーマライゼーション）
- 第3回 障害者福祉サービスの基本的理念（リハビリテーション）
- 第4回 ICF とインクルージョン
- 第5回 わが国の社会福祉の歴史
- 第6回 社会保障制度の基本的な枠組み
- 第7回 社会保険制度①（医療保険）（1）
- 第8回 社会保険制度①（医療保険）（2）
- 第9回 社会保険制度②（年金保険）（1）
- 第10回 社会保険制度②（年金保険）（2）
- 第11回 社会保険制度③（労働保険）
- 第12回 社会保険制度④（介護保険）（1）
- 第13回 社会保険制度④（介護保険）（2）
- 第14回 社会福祉サービス①（障害者福祉サービス）（1）
- 第15回 社会福祉サービス①（障害者福祉サービス）（2）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

当該、授業計画に従って、該当部分の予習を行う事。また、授業後は、プリントの赤字を中心に、そのキーワードが説明できるように復習をおこなうこと。（国家試験を意識してください。）

■ 教科書

書 名：系統看護学講座 専門基礎分野「社会保障・社会福祉」健康支援と社会保障制度③
 著者名：福田 素生・池本 美和子 他
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

社会保障制度の理解はセラピストとしても必須です。すこし難解かもしれませんがわかりにくいところはぜひ質疑応答ください。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

積極的な授業参加を期待します。

授業科目	医療福祉教育・関係法規				
担 当 者	山本永人・藤井達也・吉見剛二				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・公的扶助、児童福祉サービスまたは障害者差別解消法、成年後見制度など、社会保障制度と関連する関係法規について概説する。(山本)
- ・聴覚障害者（重複・高齢者）支援と大阪の聴覚障害者福祉の実態（吉見）
- ・言語聴覚士に関する法規、言語聴覚士法の成り立ちに関する講義を行う。(藤井)

■ 到達目標

- ・①社会保険制度と公的扶助、社会福祉サービスの概略が説明できる。②我が国の社会保障制度の展望や課題について自分の意見を言うことができる。③利用契約制度や差別の解消等、現在の福祉サービスの構造や課題を説明することができる。(山本)
- ・①「聞こえや発語の検査→分析→機能訓練」と中心主義にならないために・・・②覚障害者（対象者）の思いを受け止め（願いに寄り添う）、汲み取る（引き出す）姿勢の大切さを学ぶ。③生きがいと豊かな暮らし・人生を支える支援者としての姿勢を学ぶ・・・「聞こえないこと、話せないことの困難さ」と「願いを引き出し、寄り添いともに実現する」大切さを学ぶ。(吉見)

■ 授 業 計 画

- 第1回 公的扶助制度と生活保護法（山本）
- 第2回 児童家庭福祉と児童福祉法および関係法規、子どもの権利に関する条約（山本）
- 第3回 障害者差別解消法（山本）
- 第4回 成年後見制度について（山本）
- 第5回 大阪での聴覚障害者の専門施設づくりの歴史（親・関係者の願い、施設建設運動等）と理念を重視した実践の報告、多様な支援・実践を通じて、対象者が成長・発達していく姿・事例を紹介。手話を使いながらの講義①（吉見）
- 第6回 大阪での聴覚障害者の専門施設づくりの歴史（親・関係者の願い、施設建設運動等）と理念を重視した実践の報告、多様な支援・実践を通じて、対象者が成長・発達していく姿・事例を紹介。手話を使いながらの講義②（吉見）
- 第7回 言語聴覚士法の歴史（藤井）
- 第8回 職能組織について（藤井）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

当該、授業計画に従って、該当部分の予習を行う事。また、授業後は、プリントの赤字を中心に、そのキーワードが説明できるように復習をおこなうこと。（国家試験を意識してください。）

■ 教 科 書

書 名：系統看護学講座 専門基礎分野「社会保障・社会福祉」健康支援と社会保障制度③
 著者名：福田 素生・池本 美和子 他
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：はじめての社会保障
著者名：椋野美智子・田中耕太郎
出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

社会保障制度の理解はセラピストとしても必須です。すこし難解かもしれませんがわかりにくいところはぜひ質疑応答ください。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

積極的な授業参加を期待します。

授業科目	言語聴覚障害学概論				
担 当 者	森田婦美子・片岡紳一郎・ST 教員				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・神経系や発声発語器官、頭頸部解剖及び人体のしくみについての導入
- ・言語聴覚療法の各領域の臨床について現任者が講義を行う
- ・I 期実習ガイダンス

■ 到達目標

- ・神経系や発声発語器官、頭頸部及び人体のしくみについての概要を理解する
- ・様々な臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知る
- ・実習に先立ち、言語聴覚士として必要な各領域の知識や技術の基礎的事項を身につける

■ 授 業 計 画

- 第1回 神経系や発声発語器官、頭頸部解剖（大根）
- 第2回 人体機能の仕組み：心臓（森田）
- 第3回 人体機能の仕組み：腎臓（森田）
- 第4回 人体機能の仕組み：肝臓（森田）
- 第5回 人体機能の仕組み：脾臓（森田）
- 第6回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る（1）（ST 教員）
- 第7回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る（2）（ST 教員）
- 第8回 言語聴覚士の現場の声をきく会から学んだこと 発表（ST 教員）
- 第9回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義及び演習（1）（片岡）
- 第10回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義及び演習（2）（片岡）
- 第11回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義及び演習（3）（片岡）
- 第12回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた（1）（森田）
- 第13回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた（2）（森田）
- 第14回 I 期実習ガイダンス 感染症について（森田）
- 第15回 I 期実習ガイダンス 感染症における注意点（森田）

■ 評価方法

小テスト100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループでの課題を課す。積極的に参加すること。

■ 教 科 書

書 名：図解 言語聴覚療法技術ガイド
 著者名：深浦順一 編集主幹
 出版社：文光堂

 書 名：言語聴覚士テキスト
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

臨床実習Ⅰシラバスも参照すること。

ST 専任教員による補習数コマあり。

授業科目	言語聴覚障害診断学				
担 当 者	森田婦美子・他				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、障害レベルに応じた評価を行い、適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。運動障害性発話障害の原因と、それに応じた発声発語器官の形態。機能の検査、発話の検査による評価と訓練、および発話補助手段について述べる。(講師非公表)。
- ②摂食嚥下障害の評価に基づいた訓練法の選択について学ぶ(講師非公表)。

■ 到達目標

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえて発声発語器官の形態、機能の検査、発話の検査による評価ができるようになる。(講師非公表)。
- ②摂食嚥下障害の評価に基づいた訓練法を理解する(講師非公表)。

■ 授 業 計 画

- 第1回 導入：運動障害性発話障害の障害レベルと評価について(講師非公表)
- 第2回 発話の検査(標準ディサースリア検査、発話明瞭度検査)(講師非公表)
- 第3回 呼吸機能、発声機能の評価(講師非公表)
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の評価(講師非公表)
- 第5回 口腔構音機能の評価(運動範囲)(講師非公表)
- 第6回 口腔構音機能の評価(運動速度)(講師非公表)
- 第7回 口腔構音機能の評価(筋力)(講師非公表)
- 第8回 機器を用いた検査、反射検査など(講師非公表)
- 第9回 VTRによる症例呈示と検査の実施(講師非公表)
- 第10回 VTRによる症例呈示と検査の要約(講師非公表)
- 第11回 評価結果のまとめと所見作成(講師非公表)
- 第12回 評価結果の分析と考察(講師非公表)
- 第13回 摂食嚥下障害の評価に基づいた訓練法の選択(講師非公表)
- 第14回 摂食嚥下障害のリスク管理(講師非公表)
- 第15回 II期実習ガイダンス カルテのみかた(森田)

■ 評価方法

第1回～12回の筆記試験100%の結果にて評価する。

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

予め授業前にテキスト(標準ディサースリア検査)の準備物と評価手順と基準の箇所について、読んで準備してきてください。授業後に配布資料とテキストを読んで実際に検査手技を行って復習しておいてください。事前に検査で使用する物品の作成など準備が必要です(予習、準備 1.0時間)。講義終了後に検査手順を確認する(復習1.0時間)。

■ 教 科 書

書 名：標準ディサースリア検査
 著者名：西尾正輝
 出版社：インテルナ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

- ・ 第1～12回：予め授業前にテキスト（標準ディサースリア検査）の準備物と評価手順と基準の箇所について、読んで準備してきてください。授業後に配布資料とテキストを読んで実際に検査手技を行って復習しておいてください。事前に検査で使用する物品の作成など準備が必要です（予習、準備 1.0時間）。講義終了後に検査手順を確認する（復習1.0時間）。
- ・ 臨床実習Ⅱのシラバスも参照すること。
- ・ 新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

- ・ 臨床実習において実際行う検査ですので、確実に習得するように心がけてください。

授業科目	言語聴覚障害特論				
担 当 者	山本一郎・名徳倫明・江頭智香子・五味田裕・澤井里香子・余川ゆきの・ST 教員 他				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、ディサースリアの障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。ディサースリア検査の評価データーから総合的な分析を適切に行い、計画立案の考え方について述べる。(講師非公表)
- ②口腔の果たす2大機能である食べるということ、話すことについてその発生と発達について学ぶ。(山本)
- ③言語聴覚領域を行うに当たって知っておくべき薬の知識について学ぶ。(名徳・五味田)
- ④虐待問題について講義を行う。(江頭)
- ⑤認知症及びパーキンソン病の基礎知識について学ぶ。(澤井)
- ⑥摂食・嚥下リハビリテーションを行う上で、器質的口腔ケアによる口腔内保清は必須である。今授業では、口腔内アセスメント方法から、具体的な器質的口腔ケア方法について学ぶ。(余川)
- ⑦社会復帰とその支援について学ぶ。(講師非公表)
- ⑧国家試験を想定し、領域別問題に取り組む。(ST 教員)

■ 到達目標

- ①ディサースリア検査の評価データーからディサースリアの障害レベルに応じて、総合的な分析を適切に行い、計画立案ができるようにする。(講師非公表)
- ②発生と発達の視点から口腔機能を学び、様々な病態に対処できる知識を養う。(山本)
- ③薬物治療で言語聴覚領域に影響する薬について把握する。(名徳・五味田)
- ④虐待について理解を深める。(江頭)
- ⑤認知症及びパーキンソン病の患者様と接する時に必要な基本的知識を理解する。(澤井)
- ⑥口腔内アセスメントが出来るようになる。器質的口腔ケアが出来るようになる。(余川)
- ⑦社会復帰とその支援について理解を深める。(講師非公表)
- ⑧国家試験の受験にあたって受験対策を立て、実践できるようになる。(ST 教員)

■ 授 業 計 画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について (講師非公表)
- 第2回 呼吸機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第3回 発声機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第5回 口腔構音機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第6回 発話速度の調節法1 (講師非公表)
- 第7回 発話速度の調節法と構音訓練など (講師非公表)
- 第8回 まとめ (講師非公表)
- 第9回 顔面・口腔の発生 口腔機能の発達 (山本)
- 第10回 唇顎口蓋裂児における哺乳・摂食障害とその対処法 (山本)
- 第11回 唇顎口蓋裂児者における異常構音の分析と治療について
エレクトロパラトグラフィー (EPG) を用いた異常構音の分析と治療について (山本)
- 第12回 薬の基礎知識①用法・用量など (名徳)
- 第13回 薬の基礎知識②副作用・相互作用など (名徳)
- 第14回 薬の薬理作用 (摂食・嚥下に影響する薬剤) (名徳)
- 第15回 輸液の基礎と栄養 (名徳)
- 第16回 薬物治療の基礎 (用法・用量・副作用・相互作用、患者ケア 等) (五味田)
- 第17回 言語聴覚領域 (特に聴覚・嗅覚、摂食・嚥下機能等) に影響する薬 (五味田)

- 第18回 言語聴覚機能に影響する薬についての Q & A (五味田)
- 第19回 子供の虐待 歴史、制度の変遷、虐待の種類 (江頭)
- 第20回 虐待に関わる発達の課題 (被虐待児の心理的特徴等) (江頭)
- 第21回 虐待を取り巻く社会的背景 (江頭)
- 第22回 虐待に対しての対応 被虐待児の支援について (江頭)
- 第23回 オリエンテーション (歯科とは) ～なぜ口腔ケアが必要なのか～ (余川)
- 第24回 口腔ケアの手技 (器質的、機能的口腔ケア実習) (余川)
- 第25回 社会復帰とその支援について
社会復帰を考えるうえで必要なこと職業復帰支援の実際～当事者の方からのお話 (講師非公表)
- 第26回 社会復帰とその支援について
社会復帰を考えるうえで必要なこと職業復帰支援の実際～言語聴覚士からのお話 (講師非公表)
- 第27回 神経内科疾患の理解：パーキンソン病を中心に (澤井)
- 第28回 神経内科疾患の理解：認知症を中心に (澤井)
- 第29回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (ST 教員)
領域別問題の実践 1
- 第30回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～ (ST 教員)
領域別問題の実践 2

■ 評価方法

第1回～8回で筆記試験90%、9～28回でレポート10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

・授業前に事前に訓練手技について予め読んで準備物を準備してきてください。テキストを目を通しておくこと（予習1.0時間）。授業後に配布資料とテキストのそれぞれの治療アプローチ、訓練手技についての箇所を読み直して、実際に友人を対象に実施し、講義で行った実習の復習を行うこと（復習1.0時間）。

■ 教科書

書 名：標準ディサースリアテキスト
著者名：西尾正輝
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

- ・訓練手技の演習は2人ペアになって行うので、予めペアを組む人を確認しておくこと。
- ・新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

実際の訓練において頻用する訓練手技ですので、確実に習得するように心がけてください。

授業科目	失語症Ⅰ（基礎）				
担当者	大西環				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症とはどのような言語障害であるか、その基礎的な内容を中心に講義を行う。

■ 到達目標

失語症の言語症状やタイプ分類について理解し、臨床の観察点とすることができる。

■ 授業計画

- 第1回 失語症とは 定義と障害の特徴、臨床の流れ
- 第2回 言語モデルについて
- 第3回 失語症の言語症状 流暢性と非流暢性
- 第4回 失語症の言語症状 発話の障害について①
- 第5回 失語症の言語症状 発話の障害について②
- 第6回 失語症の言語症状 聴覚的理解障害について
- 第7回 失語症の言語症状 読み書きの障害について
- 第8回 失語症のタイプ分類①
- 第9回 失語症のタイプ分類②
- 第10回 失語症のタイプ分類③
- 第11回 純粹失読、純粹失書、失読失書
- 第12回 症状の観察の仕方①
- 第13回 症状の観察の仕方①
- 第14回 症状の観察の仕方①
- 第15回 まとめと復習

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回の復習を必ず行うこと。
疑問点は随時解決できるよう、できるだけ次の講義時間に質問すること。

■ 教 科 書

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害
著者名：竹内愛子 川内十郎 編著
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

失語症理解の基礎となる科目です。失語症Ⅱ（評価）、失語症Ⅲ（訓練）、失語症Ⅳ（臨床講義）につながるようしっかり取り組んでください。

授業科目	失語症Ⅱ（評価）				
担当者	大根茂夫				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症の治療・訓練・指導に必要な各種失語症検査法の概略を学ぶ。
検査から評価の仕方、結果の解釈の仕方、訓練法の立案を学ぶ。
各種失語症検査を標準的な実施方法で実施できるように演習を行う。

■ 到達目標

各種失語症検査の概要を知る。
各種失語症検査および関連検査を標準的な方法で実施できる。
検査結果から、結果の解釈、問題点の抽出、訓練の立案ができる。
評価報告書が書ける。

■ 授業計画

- 第1回 急性期・回復期・維持期の失語症患者の容態、医学的情報の収集の仕方、面接の仕方
- 第2回 スクリーニング検査の意義と実施方法
- 第3回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた（1）
- 第4回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた（2）
- 第5回 WAB 失語症検査の概略
- 第6回 重度失語症検査の概略
- 第7回 標準失語症検査補助検査（SLTA - ST）の概略
- 第8回 失語症語彙検査の概略
- 第9回 実用コミュニケーション能力検査（CADL）の概略
- 第10回 失語症構文検査、トークンテストの概略
- 第11回 語音弁別検査、モーラ分解・抽出検査の概略
- 第12回 鑑別診断、経過と予後、訓練・援助の方針の決定
- 第13回 評価報告書の書き方
- 第14回 症例演習（1）
- 第15回 症例演習（2）

■ 評価方法

筆記試験（100点満点）、実技試験（100点満点） 筆記試験、実技試験とも60点以上が合格

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で各種検査法の手技の説明を受けた後、学生同士でペアを作り、お互いに検査者、被検者になり検査練習を行うこと。ペアを変え、3例以上の検査練習を行うこと。検査練習は空き時間を有効に使うこと。すべての検査マニュアルを熟読し暗記すること。

■ 教科書

書 名：標準失語症検査マニュアル 改訂第2版
著者名：日本高次脳機能障害学会（旧 日本失語症学会）
出版社：新興医学出版社

書 名：なるほど！失語症の評価と治療 - 検査結果の解釈から訓練法の立案まで -
著者名：編著 小嶋知幸 執筆 大塚裕一 宮本恵美
出版社：金原出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

必要に応じて各種失語症検査の実施方法を習得するための補講を行います。

本授業は臨床実習前ガイダンスと密接に連携している。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

失語症Ⅲ（訓練）、失語症Ⅳ（臨床講義）につながるようしっかりと取り組んでください。

授業科目	失語症Ⅲ（訓練）				
担当者	橋谷玲子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症の障害構造を理解し、症例ごとの生活背景を考慮し、その訓練方法とケースごとの対処方法を学習します。

■ 到達目標

ケースを観察し、生活背景の情報収集を行い、コミュニケーション方法、訓練方法、その他臨床に必要なことを立案出来るようになることを目指します。

■ 授業計画

- 第1回 失語症の臨床
- 第2回 コミュニケーション方法と目標設定
- 第3回 症例1の評価 ブローカ失語
- 第4回 症例1の訓練
- 第5回 症例2の評価 ウェルニッケ失語
- 第6回 症例2の訓練
- 第7回 症例3の評価 他の高次脳機能障害を合併した失語症のコミュニケーション
- 第8回 症例3の訓練
- 第9回 症例4の評価 側性化の特殊な失語症の評価訓練
- 第10回 症例4の訓練
- 第11回 症例5の評価 進行性失語
- 第12回 症例5の訓練
- 第13回 症例6の評価 再帰性発話
- 第14回 症例6の訓練
- 第15回 生活に合わせたコミュニケーション方法の応用

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基礎知識に基づいて、実際の実習に向けて考えていく授業です。ケースを理解するためにどんな情報が必要なのか、症状を理解するためにどんな知識が必要なのかを話し合いながら深めていきます。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

教えてもらう授業ではありません。考えて参加する授業にしていきたいと思います。

授業科目	失語症Ⅳ（臨床講義）				
担 当 者	大根茂夫・大西環			（オムニバス）	
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

①失語症者の機能障害・能力障害・社会参加、QOLについて考え、支援のポイントを学ぶ。②失語症者に対し、スクリーニング検査、総合的失語症検査、掘り下げ検査を実施し、評価、訓練プログラムの立案、訓練までを行い、グループで報告書を作成し発表する。適宜次の内容を指導する。（失語症回復の理論と介入の実際、回復時期に合わせた援助、ゴール設定とプログラム立案、訓練の実施、評価報告書の作成）

■ 到達目標

各種失語症検査が標準的な実施方法で実施できる。
 検査結果から評価（結果の解釈、問題点の抽出）ができる。
 問題点に対し具体的な訓練法を立案できる。
 訓練に必要な教材を作成し、訓練を実施できる。
 評価報告書を作成し発表できる

■ 授業計画

第1回	臨床講義1回目	セッションの準備
第2回	臨床講義1回目	失語症者に検査を実施する
第3回	臨床講義1回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第4回	臨床講義2回目	セッションの準備
第5回	臨床講義2回目	失語症者に検査を実施する
第6回	臨床講義2回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第7回	臨床講義3回目	セッションの準備
第8回	臨床講義3回目	失語症者に検査を実施する
第9回	臨床講義3回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第10回	臨床講義4回目	セッションの準備
第11回	臨床講義4回目	失語症者に検査又は訓練を実施する
第12回	臨床講義4回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック
第13回	臨床講義5回目	セッションの準備
第14回	臨床講義5回目	失語症者に検査又は訓練を実施する
第15回	臨床講義5回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的にはグループ活動であるので、各自が積極的に意見を出し合い、レポートにまとめること。他人任せにしない。

本授業は総合的な学習であるので、失語症Ⅰ～Ⅲで学習した内容が基礎となる。実際の患者様に検査を行い、評価・訓練を考えていくためには、基礎知識が重要であり、Ⅰ～Ⅲの復習とともに、さらに基礎知識を広げていくことが必要である。また、積極的に研究論文を読み込んでいく必要もある。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士ドリルプラス失語症
著者名：編集者：大塚裕一、宮本恵美
出版社：診断と治療社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

臨床実習Ⅲに繋がる講義です。しっかりと受講してください。

授業科目	高次脳機能障害Ⅰ（概論）				
担当者	森岡悦子・中谷謙				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、注意、記憶、認知、視空間認識、行為、遂行機能など、脳の機能を理解し、それらの機能が損傷された結果生じる高次脳機能障害の障害機序と臨床像を学ぶ。

■ 到達目標

1. 脳の構造および領域別の機能を説明できる。
2. 各々の高次脳機能障害の症状を説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害の概論：高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と情報処理システム（森岡）
 第2回 注意障害：注意の機能と特性、注意障害の症状（森岡）
 第3回 記憶障害：記憶の種類、記憶の回路とメカニズム、病巣別症状（森岡）
 第4回 失行、行為・行動の障害（中谷）
 第5回 失認と関連症状（森岡）
 第6回 無視症候群・外界と身体の処理に関わる空間性障害（中谷）
 第7回 遂行機能障害：遂行機能を支える要因、遂行機能障害の症状（森岡）
 第8回 外傷性脳損傷による高次脳機能障害（森岡）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義中に重要箇所を確認するので、よく復習すること。

■ 教科書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書 名：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学 第2版
 著者名：編集 藤田郁代、阿部晶子
 出版社：医学書院

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業内に示された要点を中心によく復習すること。

授業科目	高次脳機能障害Ⅱ（評価）				
担当者	森岡悦子・中谷謙・圓越広嗣				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、高次脳機能障害の症状に関する知識を基に、高次脳機能障害の各検査の目的と実施方法、結果の解釈法を理解し、障害像の捉え方を学ぶ。また症状分析に必要な情報と合わせて考察し、高次脳機能障害の症状のまとめ方を修得する。

■ 到達目標

1. 高次脳機能検査の目的と実施方法を学び、正しく実施することができる。
2. 症状に応じて、必要な掘り下げ検査を選択し、実施することができる。
3. 検査結果を正しく解釈し、病変と症状を対応させて、障害像を捉えることができる。
4. 検査結果から高次脳機能障害の症状をまとめることができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 認知機能の評価（1）：実施演習と解釈（レーブン色彩マトリックス検査）（森岡）
- 第2回 認知機能の評価（2）：実施演習と解釈（コース立方体組合せテスト）（森岡）
- 第3回 認知機能の評価（3）：実施演習と解釈（MMSE、HDS-R）（森岡）
- 第4回 注意機能（1）：注意の特性と、注意機能障害の臨床像（森岡）
- 第5回 注意機能（2）：標準注意検査法・標準意欲評価法の目的と手順の理解（森岡）
- 第6回 注意機能（3）：標準注意検査法・標準意欲評価法の演習、結果の解釈、症状のまとめ（森岡）
- 第7回 記憶（1）：記憶障害の症状、病巣との関係（圓越）
- 第8回 記憶（2）：リバーミード行動記憶検査（RBMT）の目的と手順の理解（圓越）
- 第9回 記憶（3）：リバーミード行動記憶検査（RBMT）の演習、結果の解釈、症状のまとめ（圓越）
- 第10回 失認（1）：視覚失認、相貌失認、地誌的見当識障害、聴覚失認、触覚失認の臨床像（森岡）
- 第11回 失認（2）：標準高次視知覚検査（VPTA）の目的と手順の理解、結果の解釈、症状のまとめ（森岡）
- 第12回 視空間障害（1）：半側空間無視、構成障害、パリント症候群（中谷）
- 第13回 視空間障害（2）：BIT 行動性無視検査の目的と実施手順の理解（中谷）
- 第14回 視空間障害（3）：BIT 行動性無視検査の演習、結果の解釈、症状のまとめ（中谷）
- 第15回 高次脳機能障害の評価のまとめ（森岡）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義中に重要箇所を確認するので、よく復習すること。

■ 教 科 書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 図 書

書 名：高次脳機能障害（言語聴覚士 ドリルプラス）
 著者名：大塚裕一、金井孝典
 出版社：診断と治療社

■ 留 意 事 項

授業の復習を行うこと。実技の時間は、教員の指示に従って迅速に行動すること。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

既習の検査は復習し、手技の習熟をはかること。

授業科目	高次脳機能障害Ⅲ（臨床）				
担 当 者	森岡悦子・中谷謙・圓越広嗣				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、医学的情報と高次脳機能評価で得られた結果を基に障害像をとらえ、障害機序に沿ったリハビリテーションプログラムを立案するための知識を修得する。

■ 到達目標

1. 医学的情報と検査結果から、高次脳機能障害の障害機序を論理的に考察することができる。
2. 障害機序に基づき、適切なリハビリテーションプログラムを立案することができる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害のリハビリテーション（森岡）
 第2回 記憶障害の評価の解釈（森岡）
 第3回 記憶障害のリハビリテーション（森岡）
 第4回 半側空間無視のリハビリテーション（中谷）
 第5回 遂行機能の評価（BADS）の実施手順の理解（圓越）
 第6回 遂行機能の評価（BADS）の演習、解釈、症状のまとめ（圓越）
 第7回 遂行機能のリハビリテーション（中谷）
 第8回 認知症の病型別症状と関わり方（森岡）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義中に重要箇所を確認するので、よく復習すること。

■ 教 科 書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参 考 図 書

書 名：よくわかる失語症のセラピーと認知リハビリテーション
 著者名：編集：鹿島晴雄、大東祥孝、種村純
 出版社：永井書店

■ 留 意 事 項

授業の復習を行うこと。
 新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

症状の捉え方、リハビリテーションの進め方を理解すること。

授業科目	言語発達障害Ⅰ（援助法—基礎）				
担当者	川畑武義				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

対人援助職として仕事を進めていく上で必要な観察の視点・方法とそれらを言語化・文字化してまとめ、実習日誌や報告書やカルテ等を通して伝えることを学ぶ。第1回～第8回までは、観察と記録の初歩的な事項と、主に成人領域のVTR等を活用した講義と演習を実施する。第9回～第15回までは、小児領域のVTR等を活用した講義と演習を実施する。

■ 到達目標

臨床実習Ⅰの日誌作成を念頭に、基本的な行動観察や記述の視点・方法を習得する。

■ 授業計画

第1回	成人の観察と記録	概要及び視点について
第2回	成人の観察と記録	概要及び視点について模擬症例を用いたワーク
第3回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 1 個人ワーク
第4回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 1 グループワーク
第5回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR 1 グループワーク発表と解説
第6回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR2 グループワーク
第7回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR2 グループワーク発表と解説
第8回	成人の観察と記録	失語症患者様 VTR3 個人ワーク
第9回	小児領域における観察及び評価の視点	
第10回	小児の観察と記録	概要及び視点について模擬症例を用いたワーク
第11回	小児の観察と記録	演習1
第12回	小児の観察と記録	演習1
第13回	小児の観察と記録	演習2
第14回	小児の観察と記録	演習2
第15回	小児の観察と記録	演習3

■ 評価方法

提出物100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

演習が多い講義内容となっています。講義内にて適宜、各自で取り組んでもらう課題を出す予定です。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編
 著者名：深浦順一・内山千鶴子 編著
 出版社：建帛社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編
 著者名：深浦順一・為数哲司・内山量史 編著
 出版社：建帛社

■ 参考図書

書 名：明日からの臨床・実習に使える 言語聴覚障害診断—小児編

著者名：大塚裕一 編著、井崎基博 著

出版社：医学と看護社

書 名：明日からの臨床・実習に使える 言語聴覚障害診断—成人編

著者名：都築澄夫 編著、大塚裕一 著

出版社：医学と看護社

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

臨床実習の基礎となる観察の視点を学びます。しっかり取り組んでください。

授業科目	言語発達障害Ⅱ（概論）				
担当者	吉田紀子・川畑武義				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語発達障害の基礎的な概念と各障害の特性を学ぶ。

■ 到達目標

言語発達障害の概念と特性を理解し、それぞれの言語発達障害について説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 小児の発達と言語発達障害概論（吉田）
- 第2回 知的障害（吉田）
- 第3回 自閉症スペクトラム障害①（吉田）
- 第4回 自閉症スペクトラム障害②（吉田）
- 第5回 注意欠陥多動性障害①（吉田）
- 第6回 注意欠陥多動性障害②（吉田）
- 第7回 学習障害／発達性ディスレクシア（吉田）
- 第8回 特異的言語発達障害（吉田）
- 第9回 発達性協調運動障害（吉田）
- 第10回 言語発達障害と地域での支援（吉田）
- 第11回 発達概念（川畑）
- 第12回 姿勢と粗大運動の基礎知識（川畑）
- 第13回 言語発達障害の医学的背景（川畑）
- 第14回 脳性麻痺（川畑）
- 第15回 重症心身障害児（川畑）

■ 評価方法

吉田の範囲は筆記試験90%、提出課題10%、なお出欠および授業態度を考慮する。
川畑の範囲は筆記試験100%、授業態度を考慮する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適時授業中に指示する。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害 第3版
著者名：藤田郁代 監修
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士のための基礎知識 小児科学・発達障害学 第3版
著者名：編集 宮尾益知 小沢浩
出版社：医学書院

書 名：イラストでわかる人間発達学
著者名：上杉雅之 監修
著者名：医歯薬出版株式会社

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

川畑が担当する第11回～第15回の講義では講義内に配布する資料を基に行います。

授業科目	言語発達障害Ⅲ（評価法・基礎）				
担当者	大谷多加志・工藤芳幸・赤壁省吾				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・対象者の発達状態を適切に理解することは、小児の言語治療を行う上で非常に重要なことである。本講では小児の発達評価に最もよく用いられる検査の1つである新版 K 式発達検査2020の実施・評価を学習することを通して、小児の発達アセスメントにおける基礎的理解を深めていく（大谷）。
- ・LC スケール（言語・コミュニケーション発達スケール）を取り挙げ、言語理解・言語表出・コミュニケーションの発達アセスメントの方法を学ぶ。また、検査結果を統合・解釈し、指導目標を設定するプロセスを習得する（工藤）。
- ・乳幼児期早期の言葉発達の遅れている場合、私たちの仕事は保護者支援から始まり、他児との関わりやさまざまなコミュニケーションを主とした直接的な支援に携わっていることが多い。また、最近では放課後等デイなどに障害福祉分野に所属する ST では学齢期以降の介入も必要である。読み書き計算など学習面への支援や自身の発達特性を理解をする自己理解への支援が必要とされるようになってきている。そして、地域の中で連携を行いながら地域資源を活用し地域開拓のスキルも期待されている。いずれ就労に向くプロセスへの支援について言語聴覚士は乳幼児期から成人期までのライフステージの理解を深め子どもの未来を広げていくための知識を深める（赤壁）。

■ 到達目標

- ・小児の発達アセスメントに関する基礎知識を身につける（大谷）
- ・新版 K 式発達検査2020の概要と幼児期の検査項目の実施・評価の方法を理解する（大谷）
- ・小児の言語・コミュニケーション発達に関する評価法および指導目標設定についての基礎知識の習得（工藤）
- ・ライフステージにおける自己理解の重要性を理解し説明できるようになる（赤壁）
- ・言語聴覚士の地域での支援のあり方について知識を深める（赤壁）
- ・障害福祉の障害児通所支援サービスを理解し説明できるようになる（赤壁）
- ・障害福祉の就労サービスを理解し説明できるようになる（赤壁）

■ 授業計画

- 第1回 発達アセスメントの意義と留意点（大谷）
- 第2回 新版 K 式発達検査の概要（大谷）
- 第3回 検査の実施手順と評価① 乳児（大谷）
- 第4回 検査の実施手順と評価② 幼児（大谷）
- 第5回 検査の実施手順と評価③ 幼児（大谷）
- 第6回 検査の実施手順と評価④ 幼児（大谷）
- 第7回 検査の得点化、発達年齢・発達指数の算出（大谷）
- 第8回 検査結果にもとづく発達評価と助言、支援（大谷）
- 第9回 事例から考える発達評価・発達支援（大谷）
- 第10回 LC スケール（言語・コミュニケーション発達スケール）の概要（工藤）
- 第11回 LC スケールの実施手順と評価① 幼児期前半（工藤）
- 第12回 LC スケールの実施手順と評価② 幼児期後半（工藤）
- 第13回 検査結果の統合と解釈および指導目標設定②（工藤）
- 第14回 発達障害の特性理解と関わりについて（赤壁）
- 第15回 障害福祉サービスでの言語聴覚士の働きについて（赤壁）

■ 評価方法

授業後のショートレポート（100％）によって評価する（第1回～第9回、大谷）。講義時間内に実施する提出課題（100％）により評価する。（第10回～第13回、工藤）。講義レポートにて評価する（第14回～15回、赤壁）。科目全体の最終的な評価は大谷担当分で60％、工藤担当分で30％とする。赤壁担当分については小テスト10％で評価をする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

必要に応じて講義中に指示をする。

■ 教科書

書 名：言語発達障害学 第2版（標準言語聴覚障害学）
著者名：玉井ふみ、深浦順一
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：言語・コミュニケーション発達の理解と支援プログラム -LC スケールによる評価から支援へ-
著者名：大伴潔・林安紀子・橋本創一・菅野敦（編著）
出版社：学苑社
.....
書 名：新版 K 式発達検査2020実施手引書
出版社：京都国際社会福祉センター

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅳ（評価法－各論）				
担当者	齋藤典昭・川畑武義				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・言語検査である「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査・訓練」を学ぶ（齋藤）
- ・言語発達障害Ⅲで学んだ新版 K 式発達検査2020を用いて学生同士（ロールプレイ）で検査を実施し、報告書を作成する（川畑）
- ・WISC - Ⅳの概要と検査結果の見方、指導への活かし方の基礎を学ぶ（川畑）

■ 到達目標

1. 検査の概要を述べることができる（齋藤）
2. 検査を実施することができる（齋藤）
3. 検査サマリーを作成することができる（齋藤）
4. WISC - Ⅳの概要と実施・評価についての基礎知識を習得する（川畑）
5. 新版 K 式発達検査2020による検査結果とその他の情報を統合して、報告書にまとめることができる（川畑）

■ 授業計画

- 第1回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」検査用具に触れ、検査項目との結びつきを知る（齋藤）
- 第2回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」段階3-2の検査項目、DVD 教材視聴（齋藤）
- 第3回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」段階4-1、4-2、段階5-1、5-2の検査項目、記録用紙への転記方法（齋藤）
- 第4回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」段階2の検査項目、コミュニケーション態度の評価、DVD 教材視聴（齋藤）
- 第5回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」提出課題の説明、サマリーの作成演習（齋藤）
- 第6回 「国リハ式＜S-S 法＞言語発達遅滞検査」サマリーの作成演習（齋藤）
- 第7回 WISC - Ⅳの概要（川畑）
- 第8回 WISC - Ⅳの実施手順と結果のまとめ（川畑）
- 第9回 K-ABC II の概要（川畑）
- 第10回 DN-CAS の概要（川畑）
- 第11回 新版 K 式発達検査2020 実技演習（川畑）
- 第12回 新版 K 式発達検査2020 実技演習（川畑）
- 第13回 新版 K 式発達検査2020 実技（川畑）
- 第14回 新版 K 式発達検査2020 プロフィール作成演習（グループワーク）（川畑）
- 第15回 新版 K 式発達検査2020 プロフィール作成演習（川畑）

■ 評価方法

齋藤担当分については課題提出物40%，演習参加行動10%で評価する。※遠隔授業になった場合は課題提出物50%で評価する。川畑担当は、実技演習実施後の検査用紙、報告書を合わせて50%分の評価をする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・「言語発達障害学」p.198-p.216＜S-S 法＞の部分を読んでもおくこと。（齋藤）
- ・新版 K 式発達検査2020の講義については、言語発達障害Ⅲ（評価法 - 基礎）の内容と検査マニュアルを復習し、実際の検査場面の記録と結果処理の仕方（採点や計算など）を確認しておいて下さい。演習は検査を実施する学生と検査用紙に記載する学生に分けます。実施する学生については、事前に担当教員との相談をして下さい。（川畑）

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：新版 K 式発達検査2020実施手引書
出版社：京都国際社会福祉センター

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅴ（援助法－各論）				
担当者	加藤義弘・ネグロンちひろ・中山清司				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・言語コミュニケーション発達支援のための介入技法について学ぶ。加藤（第1回～第5回）は発達障害を中心に、それぞれの障害特性や園や学校生活で困ることへの理解、検査結果の活用や支援の方法について学ぶ。
- ・ネグロン（第6回～第11回）は、応用行動分析の概念の復習とそれをどのように子どもや成人のコミュニケーション障害の支援に適応するのか。そして応用行動分析の要素を取り入れたコミュニケーション指導法、絵カード交換式コミュニケーションシステムの指導方法の紹介する。
- ・中山（第12回～第15回）は TEACCH を背景として、ASD 児者のライフステージやコミュニケーション支援、地域生活支援などを講義する。

■ 到達目標

- ・発達の観点から見た障害の知識や支援に対する基本的な考え方が理解できる。
- ・障害特性に適した評価方法や介入技法、訓練教材を立案できる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 発達支援の基本（支援の必要性、支援方法、発達段階に即した支援内容、保護者支援など）（加藤）
- 第2回 障害特性に応じた支援①（注意欠如多動症・自閉スペクトラム症・限局性学習症への SST）（加藤）
- 第3回 障害特性に応じた支援②（注意欠如多動症・自閉スペクトラム症・限局性学習症への LST）（加藤）
- 第4回 障害特性に応じた支援③（特異的言語発達障害への指導と支援）（加藤）
- 第5回 障害特性に応じた支援④（限局性学習症の指導と支援・ICT の活用）（加藤）
- 第6回 応用行動分析の要素の復習と指導にする際の適応（どの活動下で教えるのか、強化子）（ネグロン）
- 第7回 応用行動分析の要素の復習と指導する際の適応（コミュニケーション、状況にそぐわない行動）（ネグロン）
- 第8回 応用行動分析の要素の復習（般化、レッスン形式、プロンプト、エラー修正）（ネグロン）
- 第9回 PECS[®]（ネグロン）
- 第10回 PECS[®]（ネグロン）
- 第11回 PECS[®]（ネグロン）
- 第12回 自閉症・発達障害の特性理解に基づく支援の基本（中山）
- 第13回 自閉症・発達障害の人への地域生活支援に関する事例検討（中山）
- 第14回 自閉症のコミュニケーションプログラムの開発（中山）
- 第15回 自閉症のコミュニケーションプログラムに関する事例検討（中山）

■ 評 価 方 法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

■ 教 科 書

書 名：自閉症支援のためのレジュメ集2020年度版
 著者名：中山清司
 出版社：特定非営利活動法人 自閉症 e サービス

■ 参 考 図 書

書 名：PECS マニュアル第2版

著者名：アンドリューボンディ、ロリ フロスト

出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン株式会社

■ 留 意 事 項

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅵ（援助法一応用）				
担 当 者	松下真一郎・他			（オムニバス）	
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ AAC の実際について学ぶ。（第 1～7 回）
- ・ 脳性麻痺児の言語障害の特徴やコミュニケーションの問題点を学習する。また、ボバース概念による言語治療の考え方や評価の仕方を学ぶ。その上で、摂食指導を行っていく上での基本の技術を学習する（実技）（第 8～11 回）。
- ・ 乳幼児における視覚・聴覚・体性感覚の統合の重要性を踏まえ、身体運動の必要性を考察する。更にその問題構制を自閉症スペクトラムに敷衍して考察する。（第12～15回）

■ 到達目標

1. AAC の適用について判断できる。
2. 脳性麻痺児の言語障害やコミュニケーションの問題、食事の問題点を知る。そして、それに対する援助方法を知り、理解する。また、実際に指導を行っていく際の食べさせ方、飲ませ方、咀嚼を促す方法などを習得する
3. 新たな視点から言語発達障害を捉え直し、その理解を拓げる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ AAC 概論（講師非公表）
- 第2回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 理論（講師非公表）
- 第3回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 演習（講師非公表）
- 第4回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 当事者に来ていただき演習（講師非公表）
- 第5回 マカトンサイン、サウンズ&シンボルズ 当事者に来ていただき演習（講師非公表）
- 第6回 日本版 PIC シンボルの概要、指導方法（講師非公表）
- 第7回 シンボルを使ったコミュニケーション指導の事例（講師非公表）
- 第8回 脳性麻痺児の言語障害概論（口腔機能の正常発達も含めて）（講師非公表）
- 第9回 脳性麻痺児のコミュニケーションの問題と援助（講師非公表）
- 第10回 ボバース概念による評価と治療（講師非公表）
- 第11回 摂食指導について（実技練習）（講師非公表）
- 第12回 乳幼児における視覚・聴覚・体性感覚の統合の重要性（松下）
- 第13回 乳幼児の視覚・聴覚・体性感覚の統合における身体運動の必要性（松下）
- 第14回 自閉症スペクトラムにおける視覚・聴覚・体性感覚の統合（松下）
- 第15回 自閉症スペクトラムにおける身体運動の必要性（松下）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・ AAC に関する書籍に目を通しておくこと
- ・ 脳性麻痺児・者に対する関わりについて知識を整理しておくこと
- ・ コミュニケーション・言語に関する書籍に目を通しておくこと

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法シリーズ12 改定言語発達障害Ⅲ
 著者名：笠井 新一郎
 出版社：建帛社

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士のための AAC 入門
著者名：知念洋美
出版社：協同医書出版

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅶ (援助法 - 臨床)				
担 当 者	川畑武義				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

ST と子どもが遊んでいるセッション場面を見て「子どもさんの課題」と、「ST のかわり方」について検討します。

■ 到達目標

1. 子どもの多様性に気づくことができる
2. 子どもに合わせた遊びを考えることができる
3. 子どもの遊び場面から、子どもの能力を評価することができる

■ 授業計画

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 子どもに関する情報を基に遊びの内容と設定を考える
- 第3回 症例の映像を見て記録を取る (症例①)
- 第4回 所見作成
- 第5回 振り返り、フィードバック
- 第6回 症例の映像を見て記録を取る (症例②セッション1)
- 第7回 所見作成 (グループワーク)
- 第8回 振り返り、フィードバック
- 第9回 症例の映像を見て記録を取る (症例②セッション2)
- 第10回 所見作成 (グループワーク)
- 第11回 振り返り、フィードバック
- 第12回 行動観察・各種検査の結果をもとに初期評価をまとめる①
- 第13回 行動観察・各種検査の結果をもとに初期評価をまとめる②
- 第14回 子どもに関する情報を基に遊びの内容と設定を考える①
- 第15回 子どもに関する情報を基に遊びの内容と設定を考える②

■ 評価方法

準備を含めたセッションへの取り組み20%、提出レポート80%で評価する

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

授業後、次回授業までに課題についてグループディスカッションを行い、レポートを作成・提出すること

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚障害診断 小児編
 著者名：大塚裕一、井崎基博
 出版社：医学と看護社

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編
 著者名：深浦順一・内山千鶴子 編著
 出版社：建帛社

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	音声障害				
担当者	宮田恵里				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 喉頭の解剖および呼吸と発声の仕組みを学ぶ
2. 音声障害の診断と評価方法を学ぶ
3. 音声治療の適応および実際のアプローチ方法を学ぶ
4. 音声外科と薬物療法について学ぶ
5. 気管カニューレや気管切開患者への対応および無喉頭音声について学ぶ

■ 到達目標

喉頭の解剖および呼吸と発声について理解する。
 患者の病態から音声障害が生じている原因について理論的に説明を行い、適切な評価方法および治療法の選択、音声治療のアプローチ方法を考察出来るようになる。

■ 授業計画

- 第1回 声の特性・喉頭の解剖
- 第2回 発声と呼吸の仕組み
- 第3回 音声障害の評価と診断 1
- 第4回 音声障害の評価と診断 2
- 第5回 音声障害疾患の分類 1
- 第6回 音声障害疾患の分類 2
- 第7回 音声治療の実際
- 第8回 間接訓練
- 第9回 症状対処的音声治療 1
- 第10回 症状対処的音声治療 2
- 第11回 包括的音声治療 1
- 第12回 包括的音声治療 2
- 第13回 音声外科と薬物療法
- 第14回 無喉頭音声・(気管切開患者への対応)
- 第15回 病態から考える音声治療

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎講義後にテキストおよびレジュメ、配布資料を用いて復習を行うこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法シリーズ14 改定 音声障害
 著者名：荻安誠 / 城本修 編集
 出版社：建帛社

書 名：声をみる いちばんやさしい音声治療実践ハンドブック
 著者名：宮田恵里 / 佐藤剛史 / 村上健 編集
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

やむを得ず講義を欠席した場合は、欠席した講義のレジュメを入手し、分からない箇所があれば質問して下さい。

授業科目	構音障害Ⅰ（臨床の基礎）				
担当者	松本治雄				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

話しことばの三要素である「音声」「構音」「パターン」のうち、構音の障害は意思伝達的手段として、最も中核をなす障害要因である。言語聴覚士の仕事の主体は構音の指導であるとも言える。講義は言語聴覚士が構音指導上基本として身につけるべき内容を演習的に修得することを目指している。

■ 到達目標

- ・コミュニケーションの於ける話しことばの役割を知る。
- ・構音の概念を理解し、せいじょうこうおんの産生の過程を知る。
- ・構音障害の概念を理解し、障害像を知る。
- ・構音障害の種類について理解し、その検査、分類、各種治療方法を知る。

■ 授業計画

- 第1回 障害児音声の聴き取り
- 第2回 コミュニケーションの要因を知る
- 第3回 発声発語器官の仕組みと日本語音声の成り立ち ①母音
- 第4回 日本語音声の成り立ち ②母音
- 第5回 日本語音声の成り立ち ③子音
- 第6回 日本語音声の成り立ち ④子音
- 第7回 日本語音声の成り立ち ⑤子音
- 第8回 言語障害に関わる要因 ①
- 第9回 言語障害に関わる要因 ②
- 第10回 構音障害の検査と分析・評価 ①
- 第11回 構音障害の検査と分析・評価 ②
- 第12回 構音指導の方法
- 第13回 事例による演習 ①
- 第14回 事例による演習 ②
- 第15回 事例による演習 ③ と 講義のまとめ

■ 評価方法

小テスト（5％）と 提出課題（5％）を 期末テスト（90％）に加味して評価する予定

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ① 日本語音声のすべての音の構音操作に精通し、自身で聞き分け、構音仕分けること
- ② 発音記号（国際音標文字 IPA）の熟達（様々な音を聴取し、即記述できるよう身体動作として身につける）
- ③ 原則、毎回小テストを実施していくので、自己の熟達度を測り、100％を達成する
- ④ 巷に溢れる様々な音に留意し、自分で再現し、可能なものは記号化してみる習慣を身につける

■ 教科書

書 名：改訂 機能性構音障害
 著者名：本間慎治編著
 出版社：建帛社

■ 参考図書

書 名：構音障害の臨床
著者名：阿部雅子
出版社：金原出版

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

◎構音操作は身体運動でもあるので、自身で反復練習し身に付けることが大切である。

授業科目	構音障害Ⅱ（機能性）				
担当者	吉田紀子・松本治雄				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

機能性構音障害の指導に必要な基礎知識を学ぶ。
 構音の評価および結果の分析、指導のすすめかたについて学ぶ。

■ 到達目標

- ・ 構音発達の過程と機能性構音障害について理解する。
- ・ 構音を正確に聴き取り、記録することができる。
- ・ 構音障害の検査、結果の分析、構音指導を立案・実施することができる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 機能性構音障害とは（吉田）
 第2回 幼児期の構音発達（吉田）
 第3回 構音の聴き取りと記録（吉田）
 第4回 機能性構音障害における構音の誤り①（吉田）
 第5回 機能性構音障害における構音の誤り②（異常構音）（吉田）
 第6回 構音の評価（吉田）
 第7回 構音検査（実習）（吉田）
 第8回 評価結果の分析（吉田）
 第9回 指導プログラムの立案（吉田）
 第10回 構音別の指導方法（吉田）
 第11回 ケーススタディー（吉田）
 第12回 事例紹介（松本）（吉田）
 第13回 事例紹介（松本）（吉田）
 第14回 事例紹介（松本）（吉田）
 第15回 事例紹介（松本）（吉田）

■ 評価方法

筆記試験100%、なお出欠および授業態度を考慮する

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜講義中に指示します。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法シリーズ 改訂機能性構音障害
 著者名：本間 慎治
 出版社：建帛社

■ 参 考 図 書

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	構音障害Ⅲ（器質性）				
担当者	藤原百合				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

器質性構音障害（口蓋裂）について、基礎的知識、口蓋裂に伴う様々な問題点や、チームアプローチについて学ぶ。また、鼻咽腔閉鎖機能検査や構音検査の実施、治療計画の立て方や構音訓練について学ぶ。

■ 到達目標

口蓋裂に伴う構音障害の評価・診断、指導・訓練に関する知識・技能・態度を身につける。

■ 授 業 計 画

- 第1回 正常な発話のプロセス：呼吸、発声、共鳴、構音
- 第2回 器質性構音障害の定義、原因疾患、発症メカニズム、関連障害
- 第3回 口蓋裂に伴う発話の障害（発声、共鳴、構音）
- 第4回 評価：発話の聴覚的印象
- 第5回 演習：聴覚的评价
- 第6回 評価：口腔顔面の形態・機能
- 第7回 機器を用いた評価：鼻咽腔閉鎖機能、構音機能
- 第8回 器質的異常に対する医学的治療：外科的、歯科補綴的治療
- 第9回 言語治療：機能訓練、構音訓練、視覚的フィードバック訓練
- 第10回 演習：構音訓練
- 第11回 口蓋裂に伴う問題：哺乳・離乳、発達、聴力、心理社会的問題
- 第12回 口蓋裂のチーム医療、年齢による対応の変化
- 第13回 症例検討：年齢別の症例に対する対応
- 第14回 症例検討：聴覚的评价から治療方針を考える
- 第15回 まとめ（国家試験過去問）

■ 評価方法

筆記試験（90%）、演習（10%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

資料を前もって配布しますので、教科書の該当箇所を読んで予習・復習してください。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚診断学 発声発語障害学 第3版
 著者名：藤田郁代監修
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：口蓋裂の言語臨床 第3版
 著者名：岡崎恵子、加藤正子、北野市子
 出版社：医学書院

書 名：口蓋裂言語のスピーチセラピー
 著者名：Karen J. Golding-Kushner 早川統子訳
 出版社：一般財団法人 口腔保健協会

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

疑問点は皆で共有できるよう授業中に積極的に質問してください。

授業科目	構音障害Ⅳ（運動障害性）				
担当者	熊倉勇美				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

dysarthria（運動障害性構音障害）、口腔・中咽頭がん術後の器質性構音障害など、これらに関連する領域について学びます。言語聴覚士が行う評価法、訓練法、それに医師、歯科医師との協業について、具体例を case study で示しますので、耳で聴き、目で見て学びましょう。

■ 到達目標

上記のように成人の構音障害を理解し、分析と訓練のプランニング、実施が出来るようにしましょう。

■ 授業計画

- 第1回 構音障害と言語聴覚士が行う臨床の流れ
- 第2回 dysarthria（運動障害性構音障害）とは、どのようなものか
- 第3回 case study: dysarthria、失語症と発語失行（apraxia of speech）など
- 第4回 case study: 原因疾患と臨床分析①
- 第5回 case study: 原因疾患と臨床分析②
- 第6回 言語聴覚士の果たす役割：観察、主訴の確認、検査、評価分析、訓練の立案
- 第7回 包括的検査と要素的検査：その考え方と方法
- 第8回 case study：リハビリテーションの実際①
- 第9回 case study：リハビリテーションの実際②
- 第10回 拡大・代替コミュニケーション（AAC）の考え方と方法
- 第11回 organic articulation disorders（器質性構音障害）とはどのようなものか
- 第12回 口腔・中咽頭がんの原因とその治療
- 第13回 case study：評価と訓練
- 第14回 補綴治療の考え方と方法
- 第15回 全体のまとめ

■ 評価方法

筆記試験（100%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義は case study などですべて具体的に、見て、聴いて分かるように進めます。演習でも聴き取りなどを行います。確認したいことや疑問点などがあれば、いつでも積極的に発言してください。授業中に、予習や復習に関しては指示します。教科書は下記のように2冊必要です。

■ 教 科 書

書 名：改訂 運動障害性構音障害
 著者名：熊倉勇美 編著
 出版社：建帛社

書 名：口腔・中咽頭がんのリハビリテーション＊構音障害、摂食嚥下障害＊
 著者名：溝尻源太郎・熊倉勇美編著
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

無断欠席や遅刻に注意して下さい。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

成人の発話障害（運動障害性構音障害、器質性構音障害）の評価と訓練について、具体的・实际的に理解してください。

授業科目	嚥下障害Ⅰ（基礎と評価）				
担当者	講師非公表				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・摂食嚥下障害とは何かを学ぶ。
- ・正常嚥下の解剖やメカニズム、摂食嚥下障害の検査・評価等、基本的な事項について学ぶ。

■ 到達目標

- ・摂食嚥下障害とは QOL 全てに関わる障害であるということを理解することが出来る。
- ・嚥下に関わる解剖、生理、神経機構、病態を理解することが出来る。
- ・摂食嚥下障害の評価法を理解し、簡易検査は実施できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 摂食嚥下障害の概論
- 第2回 解剖（口腔と咽頭）
- 第3回 解剖（喉頭と食道）
- 第4回 咀嚼と呼吸
- 第5回 生理と神経機構
- 第6回 嚥下モデル
- 第7回 誤嚥の種類
- 第8回 原因と病態
- 第9回 年齢的变化、サルコペニア、フレイル、廃用症候群
- 第10回 評価の概要
- 第11回 全体像や観察評価の視点
- 第12回 発声発語器官の評価
- 第13回 嚥下機能の評価（ST が実施可能なもの）
- 第14回 嚥下機能の評価（その他）
- 第15回 リスク管理と全体のまとめ

■ 評価方法

試験100%
筆記試験（100点満点）と実技試験（100点満点）。どちらも60点以上で合格。両試験に合格すること。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で小テストを行いますので復習をしておいてください。また、演習が多い講義です。スムーズに評価ができるようになるまで練習をしてください。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学
著者名：倉智雅子
出版社：医歯薬出版

書 名：摂食嚥下ビジュアルリハビリテーション
著者名：稲川利光
出版社：Gakken

書 名：言語聴覚士ドリルプラス摂食嚥下障害
著者名：大塚裕一、福岡達之
出版社：診断と治療社

■ 参考図書

書 名：摂食嚥下リハビリテーション 第3版
著者名：才藤栄一 植田耕一郎
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

教科書は嚥下障害ⅠとⅡ共通で使用します。
配布資料の各章に必要な教科書名を記載していますので、それを参照して持参してください。
後半の実技演習では別途持ち物の指示をしますので持参してください。
新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する
場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方
法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

摂食嚥下障害を学ぶ上で基礎となる科目です。しっかりと基礎知識を身に付けてください。

授業科目	嚥下障害Ⅱ（訓練と画像診断）				
担当者	田上恵美子・戸倉晶子				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・摂食・嚥下障害の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える。（田上）
- ・嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の目的、手順、解析方法について学習し、実際の画像を評価する。（戸倉）

■ 到達目標

- ・臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる。（田上）
- ・嚥下造影検査（VF）・嚥下内視鏡検査（VE）の評価方法を理解し、検査結果から問題点の抽出ができる。（戸倉）

■ 授 業 計 画

- 第1回 嚥下関連筋の解剖、呼吸・構音器官評価の復習（田上）
- 第2回 評価内容の解釈、訓練項目の組み立て、訓練法の実際Ⅰ（田上）
- 第3回 評価内容の解釈、訓練項目の組み立て、訓練法の実際Ⅱ（田上）
- 第4回 間接訓練（呼吸・咳嗽など）演習（田上）
- 第5回 間接訓練（頸部・顎・シャキア・メンデルソンなど）演習（田上）
- 第6回 間接訓練（舌・口唇・軟口蓋・ガムラビングなど）演習（田上）
- 第7回 直接訓練（頸部聴診・意識嚥下・横向き嚥下・ひと口量・丸のみ・顎引き・頭頸部など）（田上）
- 第8回 直接訓練（複数回嚥下・交互嚥下・一側嚥下・姿勢など）演習（田上）
- 第9回 姿勢調整・介助法（田上）
- 第10回 経口移行の目安、段階的摂食訓練（田上）
- 第11回 嚥下造影検査（VF）の目的・手順について（戸倉）
- 第12回 嚥下造影検査（VF）による評価、解析方法（戸倉）
- 第13回 画像の評価（戸倉）
- 第14回 嚥下内視鏡検査（VE）の目的・評価について（戸倉）
- 第15回 嚥下造影検査（VF）と嚥下内視鏡検査（VE）の比較、まとめ（戸倉）

■ 評 価 方 法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習・復習を行うこと。また、空き時間を利用して実技の練習も積極的に行い、知識と技術の習得に努めること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学

著者名：倉智雅子

出版社：医歯薬出版

書 名：摂食嚥下ビジュアルリハビリテーション

著者名：稲川利光

出版社：Gakken

■ 参考図書

書 名：脳卒中の摂食・嚥下障害 第2版

著者名：藤島一郎

出版社：医歯薬出版

書 名：目で見る嚥下障害－嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として

著者名：藤島一郎

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

教科書は嚥下障害ⅠとⅡ共通で使用します。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	嚥下障害Ⅲ（事例・臨床）				
担当者	田上恵美子・糸田昌隆 他				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下リハビリテーションの取り組みの実際について学ぶ
成人・高齢者における摂食・嚥下障害の病態診断とリハビリテーションの具体的対応法、周辺事項への対応法

■ 到達目標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる
病態別嚥下障害に関する臨床現場における具体的対応法の立案が可能になる

■ 授業計画

- 第1回 変性疾患の嚥下障害学概論（田上）
- 第2回 ALS 事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第3回 ALS 事例に対する意思伝達演習（空書・読唇・50音表・透明板・読み上げ法）（田上）
- 第4回 パーキンソン病事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第5回 多系統萎縮症・筋ジストロフィー・重症筋無力症などの事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第6回 ST 訪問訓練について、その実際と課題（田上）
- 第7回 成人・高齢者の正常嚥下の理解及び咀嚼の生理（糸田）
- 第8回 摂食・嚥下障害への具体的対応法（糸田）
- 第9回 全身管理（サルコペニア・オーラルフレイル等）（糸田）
- 第10回 脳血管疾患を中心に摂食嚥下障害の臨床の流れ（講師非公表）
- 第11回 脳血管疾患を中心に摂食嚥下障害の症例検討 症例1の紹介（講師非公表）
- 第12回 脳血管疾患を中心に摂食嚥下障害の症例検討 症例1の分析（講師非公表）
- 第13回 脳血管疾患を中心に摂食嚥下障害の症例検討 症例2の紹介（講師非公表）
- 第14回 脳血管疾患を中心に摂食嚥下障害の症例検討 症例2の分析（講師非公表）
- 第15回 脳血管疾患を中心に摂食嚥下障害の症例検討 まとめ（講師非公表）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、質問等で疑問点の解決に努めること

■ 教 科 書

書 名：ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション in DVD ～50症例から学ぶ実践的アプローチ～
著者名：里宇明元，藤原俊之監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：事例でわかる摂食・嚥下リハビリテーション 現場力を高めるヒント
著者名：出江紳一，近藤健男，瀬田拓編集
出版社：中央法規

■ 留 意 事 項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	嚥下障害Ⅳ（チームアプローチ）				
担 当 者	大塚佳代子・永野彩乃・浦田ちひろ・松岡俊哉・森田婦美子・余川ゆきの 大根茂夫 他				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・カニューレの構造や役割について学ぶ。（大根）
- ・摂食嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を演習を交えて学ぶ。気管切開患者の嚥下・発声発語障害の訓練法を学ぶ。（大塚）
- ・チームアプローチを行うにあたり多職種の業務内容を知り、連携内容について知る。（永野、浦田、松岡）
- ・吸引について学ぶ。（森田）
- ・リスク管理について学ぶ。（講師非公表）

■ 到達目標

臨床上必要な知識を身に付け、手技を実践できるようになる。気管切開患者の嚥下障害と発声発語障害について理解し、訓練方法を学ぶ。（大塚）
 管理栄養士が行う業務内容と連携時に必要な知識を理解する。（橋本）
 歯科衛生士が行う口腔リハビリテーションについて知識を得る。（余川）
 看護師が行う業務内容と連携時に必要な知識を理解する。（永野）
 摂食嚥下障害に必要なポジショニングについて理解する。（松岡）
 吸引についての大枠を理解する。（森田）
 言語聴覚士に求められるリスク管理について理解する。（講師非公表）

■ 授 業 計 画

- 第1回 カニューレの構造・役割・種類と取扱いについて、吸引の基本的知識（大根）
 第2回 気管切開患者の嚥下障害と発声発語器官障害（大塚）
 第3回 気管切開患者の嚥下障害と発声発語訓練（大塚）
 第4回 内科的疾患と口腔ケア～動画を用いて～（余川）
 第5回 基本的な口腔ケアの注意点と手技（機能的口腔ケア実習）（余川）
 第6回 栄養管理について（浦田）
 第7回 嚥下食や治療食、食形態について（浦田）
 第8回 ナースがSTに期待すること（永野）
 第9回 チーム医療について（リハ栄養を例に）（永野）
 第10回 摂食嚥下訓練時のポジショニング（松岡）
 第11回 吸引の技術と目的根拠の理解及び手順の理解（森田）
 第12回 吸引の演習①（森田）
 第13回 吸引の演習②（森田）
 第14回 リスク管理①（講師非公表）
 第15回 リスク管理②（講師非公表）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜授業中に指示する。

■ 教科書

書 名：発声発語障害学
著者名：藤田郁代
出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：摂食嚥下ビジュアルリハビリテーション
著者名：稲川利光
出版社：Gakken

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

演習の多い講義です。積極的に参加してください。
また持ち物については別途連絡しますので、忘れない様持参してください。

授業科目	吃音				
担 当 者	土屋美智子				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

吃音の基礎知識や臨床に必要な基本的技能について学習する。

■ 到達目標

吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としての援助のあり方を理解する。
「吃音とは何か」を理解し、情報収集（検査含む）、評価および指導・訓練など臨床に必要な基本的知識・技能を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 【吃音・流暢性障害の基本的知識】
 第2回 【吃音症状】 吃音中核症状とその他の非流暢性などについて
 第3回 【進展段階】 吃音の進展段階について理解する
 【吃音児・者のおかれている現状】 吃音児・者のおかれている現状を知り、どのように援助すべきかを考える
 第4回 【吃音・流暢性障害臨床①】 吃音・流暢性障害臨床の流れ 情報収集
 第5回 【吃音・流暢性障害臨床②】 吃音検査法他
 第6回 【吃音・流暢性障害臨床③】 吃音の総合評価について（症例検討）
 第7回 【吃音・流暢性障害臨床④】 吃音・流暢性障害の指導・訓練法
 第8回 【吃音・流暢性障害臨床⑤】 吃音の指導・訓練法 再評価（症例検討）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

■ 教科書

書 名：言語聴覚士ドリルプラス 吃音・流暢性障害
 著者名：土屋美智子
 出版社：診断と治療社

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	聴覚障害Ⅰ（概論）				
担当者	矢吹裕栄・塩見千夏				（オムニバス）
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚障害学の基礎となる聴覚の器官の解剖と機能を理解し、難聴と聴覚検査との関係を学習する。
 加えて、聴覚検査の基礎を学び、検査結果と聴覚障害との関連について学ぶ。
 国家試験合格への基礎学習となる。

■ 到達目標

聴こえの仕組みの基礎知識を習得する。
 難聴のタイプ分類と聴覚検査法の基礎を習得し、検査結果から難聴のタイプを推定できるようになる。

■ 授 業 計 画

- 第1回 基礎用語の確認
音とは何か、「きこえる」と言うこと。聴覚障害を学ぶにあたって最低限必要な知識を確認する（矢吹）
- 第2回 聴覚器の解剖
外耳・中耳の解剖と機能を確認する（矢吹）
- 第3回 聴覚器の解剖
内耳の解剖・機能を確認する（矢吹）
- 第4回 前半のまとめと復習（矢吹）
- 第5回 聴覚障害で見られる症状と問題点を考え確認する（矢吹）
- 第6回 難聴のタイプ分類を確認する（矢吹）
- 第7回 聴覚検査法1：主な聴覚検査の概要を確認する（純音聴力検査）（矢吹）
- 第8回 聴覚検査法2：主な聴覚検査の概要を確認する（純音聴力検査）（矢吹）
- 第9回 聴覚障害の実態 障害の擬似体験（塩見）
- 第10回 聴覚障害を来す疾患（塩見）
- 第11回 聴覚障害への対応（塩見）
- 第12回 補聴器の仕組みと適応（塩見）
- 第13回 人工内耳の仕組みと適応（塩見）
- 第14回 聴力検査の復習と結果のみかた（塩見）
- 第15回 まとめ（塩見）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

学習内容が多くなるため、日々の復習が欠かせません。基本的事項の理解の積み重ねが重要な分野であり、基礎が疎かになるとその先の理解が難しくなります。その日のうちにその日の学習内容を復習する事が望ましいです。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第2版
 著者名：中村公枝 城間将江 鈴木恵子
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：聴力検査の実際（改訂 4 版）
著者名：日本聴覚医学会 編
出版社：南山堂

■ 留意事項

基本的には学習内容は講義で使用するスライドに記載されています。講義はスライド中心で進行します。新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	聴覚障害Ⅱ（聴覚検査法）				
担当者	矢吹裕栄・長知子・塩見千夏・友江達也・立石篤識・高村ますみ 他				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・聴覚障害の特徴や分類、原因を知り、その検査法を学ぶ。聴覚検査の基本について学び、難聴の発見方法、補聴の方法とその評価方法について学ぶ。聴力の評価を基にした、ことばやコミュニケーションのリハビリテーション・発達支援の方法、また保護者等への支援について学ぶ（立石または高村）。
- ・前期の学習内容から更に聴覚検査法の基礎を確認する。そして、今まで学習した解剖・機能と検査等の基礎知識の関連を確認する。また、人工内耳の原理と機能、調整の基礎を確認し、装用者の事例を知る（矢吹）
- ・標準純音聴力検査・語音聴力検査・インピーダンスオージオメトリー・自記オージオメトリ・SISI 検査・ABR 検査について、実際の聴覚検査機器を用いて手順と方法を学ぶ（長・塩見・友江）
- ・幼小児の聴力検査について、聴覚検査機器などを用いて、ロールプレイしながら学ぶ。2 年の聴覚障害Ⅲの準備教育として、臨床における補聴器装用について学ぶ（講師非公表）

■ 到達目標

- ・聴覚障害の基礎知識の理解とその評価法を知る。聴覚検査法の実施方法とその評価方法を理解する。補聴方法とその効果の評価法について理解する（立石または高村）。
- ・聴覚器・疾患・検査結果の関連を整理する。人工内耳の仕組みを理解する。人工内耳装用者の実態を知る。（矢吹）
- ・検査機器の構成と検査の目的および手順について説明できる（長・塩見・友江）
- ・幼小児の聴力検査について、種類と方法、適応年齢をいう事ができる。補聴器の構造と装用について概略を説明できる（講師非公表）

■ 授 業 計 画

- 第1回 耳の構造と機能・聴覚障害の検査法（立石または高村）
- 第2回 小児難聴の早期発見・新生児聴覚スクリーニング検査と精密聴力検査（立石または高村）
- 第3回 難聴：分類と原因（立石または高村）
- 第4回 乳幼児の聴力検査（立石または高村）
- 第5回 補聴の方法と補聴効果の評価方法（立石または高村）
- 第6回 聴力の評価を基にした療育や発達支援の方法（立石または高村）
- 第7回 聴覚検査法1：主な聴覚検査の概要を確認する（語音聴力検査）（矢吹）
- 第8回 聴覚検査法2：主な聴覚検査の概要を確認する（他覚的聴力検査）（矢吹）
- 第9回 聴覚障害の原因となる疾患を復習する（矢吹）
- 第10回 聴覚器・疾患・検査結果の関連を確認する（グループワーク）（矢吹）
- 第11回 人工内耳の仕組みや原理を確認する（矢吹）
- 第12回 人工内耳の仕組みの具体的なシステムや訓練の基本的な流れを確認する（矢吹）
- 第13回 人工内耳の適応基準や実際の使用者の事例のビデオ試聴（矢吹）
- 第14回 標準純音聴力検査について（長）
- 第15回 標準純音聴力検査の検査演習（長）
- 第16回 Bekecy 検査について（友江）
- 第17回 Bekecy 検査について（友江）
- 第18回 閾値上検査について（友江）
- 第19回 閾値上検査の検査演習（友江）
- 第20回 聴性脳幹反応聴力検査について（塩見）
- 第21回 聴性脳幹反応聴力検査の検査演習（塩見）
- 第22回 インピーダンスオージオメーターについて（長）
- 第23回 語音聴力検査について（長）

- 第24回 聴覚検査結果の解説 検査目的と意義（講師非公表）
- 第25回 聴覚検査結果の解説 検査目的と意義（講師非公表）
- 第26回 幼小児の聴力検査（講師非公表）
- 第27回 幼小児の聴力検査（講師非公表）
- 第28回 臨床の実際 発達遅滞例の聴力評価（講師非公表）
- 第29回 臨床の実際 発達遅滞例の聴力評価（講師非公表）
- 第30回 まとめ（講師非公表）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・教科書にある項目は前もって目を通しておいて下さい。（立石または高村）
- ・前期の聴覚障害Ⅰの内容を踏まえて授業が進みます。聴覚障害Ⅰで理解に不安のある場合は復習をしておく必要があります。（矢吹）
- ・各種聴覚検査の目的・適応・方法について理解する事。互いに測定し合い、純音聴力検査およびティンパノメトリーのプローブ装着が出来るようになること。幼小児の聴覚検査の種類と適応年齢について憶えること。補聴器フィッティングについて説明できるようになること。

■ 教科書

書 名：聴覚検査の実際 改訂4版
著者名：日本聴覚医学会
出版社：南山堂

■ 参考図書

■ 留意事項

基本的には学習内容は講義で使用するスライドに記載されています。講義はスライド中心で進行します。新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

1年後期は前期に比べ日程が厳しく、欠席をするとその遅れを取り返すのが大変なことが多いです。無断欠席や遅刻に注意してください。

授業科目	聴覚障害Ⅲ（各論）				
担当者	田中美郷・大森千代美・中井弘征・本庄良一・福田信二郎				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚障害児対策の最近の動向と今後を展望し、ST に期待される役割。人工内耳対手話：両者を対立的でなく共生に向けての新しい方法論。聴覚障害児の療育／教育の目標と方法（田中）聴覚障害教育における指導・支援の実際について学ぶ（中井）難聴乳幼児の発見とことばを育てる関わり方について学ぶ（大森）補聴器適合の基本的スキルと、乳幼児・学童児・青年期の各年代ごとの補聴器支援・装用指導について実務上の留意事項を学ぶ（本庄）聴覚障害領域の復習を行い、ケースワークを通じて、その知識の定着を図る。（福田）

■ 到達目標

1. 聴覚障害児に対する言語（language）教育の意義 2. そのためには如何なる指導があるか 3. 聴覚口話と手話を対立させるのではなく、手話を聴覚口話の発達に活用する方法 4. 聴覚障害児の先々の人生を想像して、早期療育の意義を感じる（田中）個々の実態に合わせたコミュニケーション方法や指導・支援について理解できる（中井）難聴乳幼児のことばを育てるための関わりの技法や実際の療育の様子を知る（大森）1. 補聴器適合に関する具体的操作が説明できる 2. 補聴器装用指導上の留意事項を各年代ごとに説明できる 3. 補聴器援助機器の役割と適合について説明できる 4. 装用に関わる理解啓発指導について説明できる（本庄）聴覚障害領域全般を概観し、国家試験に対応する知識を整理できる（福田）

■ 授 業 計 画

- 第1回 聴覚障害児対策の昨今、最近の動向（田中）
- 第2回 聴覚障害児の診方、対策を念頭に置いて（田中）
- 第3回 人間の聴覚、末梢聴器及び脳の両面から（田中）
- 第4回 聴覚障害児の療育／教育の目標（田中）
- 第5回 補聴器・人工内耳・手話について（田中）
- 第6回 私の50年余りの実践の成果と結論、今後の提言（田中）
- 第7回 難聴児の発見（大森）
- 第8回 難聴児のことばを育てる関わり（大森）
- 第9回 難聴児療育の実際Ⅰ（大森）
- 第10回 難聴児療育の実際Ⅱ（大森）
- 第11回 聴覚障害教育を理解するための歴史的経過（中井）
- 第12回 聴覚障害教育の実際Ⅰ（聴力の把握、聴覚学習）（中井）
- 第13回 聴覚障害教育の実際Ⅱ（言語指導・自立活動、進路）（中井）
- 第14回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援：乳児期（本庄）
- 第15回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援：幼児期（本庄）
- 第16回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援：学童期（本庄）
- 第17回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援：青年期（本庄）
- 第18回 聴覚障害を来す疾患の復習（1）（福田）
- 第19回 聴覚障害を来す疾患の復習（2）（福田）
- 第20回 聴覚障害を来す疾患の復習（3）（福田）
- 第21回 聴覚障害の遺伝子診断（福田）
- 第22回 新生児聴覚スクリーニング検査（福田）
- 第23回 聴覚検査の復習（福田）
- 第24回 聴覚障害の検査と評価（福田）
- 第25回 聴覚障害の心理的援助・各種助成制度（福田）
- 第26回 聴覚障害児のケースワーク（1）（福田）

第27回 聴覚障害児のケースワーク (2) (福田)
第28回 聴覚障害児のケースワーク (3) (福田)
第29回 聴覚障害児のケースワーク (4) (福田)
第30回 まとめ (福田)

■ 評価方法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書指定されている「聴覚障害の実際」のⅠ基礎編を、第1回～第6回の集中講義前に、Ⅱ実践編を第7回～第10回の集中講義前に読了しておくこと。

■ 教科書

書 名：聴覚活用の実際
著者名：田中美郷 廣田榮子
出版社：聴覚障害者教育福祉協会

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	補聴器・人工内耳				
担 当 者	竹田利一・塩見千夏・近藤香菜子・他				
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

補聴器のフィッティングにおける総合的な知識、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択、補聴器適合検査の指針（竹田）人工内耳等の仕組みや適応、マッピング、聴覚障害児者の臨床の実際について学ぶ（近藤・塩見・他）

■ 到達目標

補聴器のフィッティングにおける総合的な知識、補聴器適応の決定、調整と選択の基礎、補聴器適合検査結果の評価について説明できる（竹田）人工内耳の原理を知り、適応や装着・リハビリテーションの内容や進め方を説明できる。人工内耳装用者など聴覚障害児者に適切な関わり方ができ、必要なリハビリテーション・リハビリテーションを提案することができる（近藤・塩見・他）

■ 授 業 計 画

- 第1回 補聴器の種類と仕組み（竹田）
- 第2回 補聴器の性能（補聴器の最新デジタル機能）（竹田）
- 第3回 補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、補聴器特性検査装置を使った実習（竹田）
- 第4回 補聴器調整器の使い方、調整器の意味（竹田）
- 第5回 イヤモールドに関する講義（竹田）
- 第6回 補聴器フィッティングの考え方（リニア・ノンリニア増幅）（竹田）
- 第7回 補聴器の適応と選択、補聴器装用指導（竹田）
- 第8回 補聴器装用効果の評価と補聴器適合検査の指針2010の解説（竹田）
- 第9回 難聴幼児の母親指導（塩見）
- 第10回 難聴を有する大学生の支援（塩見）
- 第11回 人工内耳の仕組み・聴こえ（近藤）
- 第12回 マッピングの実際、人工内耳リハビリテーション（近藤）
- 第13回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（講師非公表）
- 第14回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（講師非公表）
- 第15回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（講師非公表）

■ 評 価 方 法

試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回～第8回は、1年時、2年前期に学習した補聴器の仕組み、特性測定の復習をして講義に臨むこと。第13回～15回はこれまで聴覚障害ⅠⅡⅢ、耳鼻咽喉科学、補聴器・人工内耳の第1回～12回の講義までの内容を総復習するので、過去のノートや教科書をよく読んでおくこと。講義中に質問し、口頭で解答を求めます。

■ 教 科 書

書 名：補聴器フィッティングと適応の考え方
 著者名：小寺一興
 出版社：診断と治療社

■ 参考図書

■ 留意事項

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	視覚聴覚二重障害				
担 当 者	村江鉄平・ST 教員				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①視覚障害者の概要、特徴等を知り、理解を深める。②視覚聴覚二重障害者の概要、特徴等を知り、理解を深める。③視覚障害者を取り巻く現状を知り理解を深める。(村江)
④視覚障害者の福祉施設の見学と講義 (ST 教員)

■ 到達目標

- ①視覚障害者（盲・弱視）、及び視覚聴覚二重障害（盲ろう者）への理解を深め、彼らとより良いかわりが持てるようになるための基礎的な知識を得る。(村江)
②視覚障害者を取り巻く現状を知り理解を深める (ST 教員)

■ 授 業 計 画

- 第1回 視覚の基礎・視覚障害者（盲、弱視）とは・様々な見え方（村江）
第2回 視覚障害者（盲者）についての理解と支援（村江）
第3回 点字への理解（村江）
第4回 視覚障害者（弱視者）についての理解と支援Ⅰ（村江）
第5回 視覚障害者（弱視者）についての理解と支援Ⅱ・視覚障害者の歩行と安全（村江）
第6回 視覚聴覚二重障害（盲ろう者）への理解と支援（村江）
第7回 視覚障害者福祉の歴史と現状1（施設見学を含む）(ST 教員)
第8回 視覚障害者福祉の歴史と現状2（施設見学を含む）(ST 教員)

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適時講義中に指示します。
施設見学の詳細は別途連絡します。

■ 教 科 書

■ 参考図書

■ 留意事項

講義の中で、アイマスクをつけての体験実習を行います。アイマスクを事前に準備してください。
新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する場合があります。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床実習Ⅰ				
担当者	大西環・大根茂夫・川畑武義				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅰ期臨床実習（見学実習） 設定期間：1 週間

■ 到達目標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。
 実習協力施設・病院にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。
 毎日実習日誌を作成し、提出する。
 SV から与えられた課題のレポートなどを作成する。
 「実習のふり返し」を作成する。
 詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取り組み
 - ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ③ SV からの種々の情報
 - ④ SV 記載の成績表・所見
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑦を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。
 実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書 名：言語聴覚障害診断 ―小児編

著者名：大塚裕一、井崎基博

出版社：医学と看護社

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の4 / 5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床実習Ⅱ				
担 当 者	大西環・大根茂夫・川畑武義				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	5 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅱ期臨床実習（評価実習） 設定期間：5 週間

■ 到達目標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、指導を受けながら言語聴覚療法における検査及び評価が出来るようになる。また、指導援助プログラムの立案について考えることが出来る。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。実習協力施設、病院様にて、ご指導いただく SV の指示、監督のもと、患者（児）様に検査等を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案する。

実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などをする。

「実習のふり返し」を作成する。

症例報告書を作成する。

詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取組み
 - ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ③ SV からの種々の情報
 - ④ SV 記載の成績表・所見
 - ⑤ 症例報告書
 - ⑥ 実習日誌
 - ⑦ 出席状況
 - ⑧ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書 名：言語聴覚障害診断 - 小児編

著者名：大塚裕一、井崎基博

出版社：医学と看護社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する可能性がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床実習Ⅲ				
担当者	大西環・大根茂夫・川畑武義				(オムニバス)
専攻(科)	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	6 単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅲ期臨床実習（総合実習） 設定期間：8 週間

■ 到達目標

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。検査及び評価に基づき、指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。

■ 授業計画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導・監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案、訓練等実際の言語聴覚療法を経験する。実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などを作成する。

「実習のふり返し」を作成する。症例報告書を作成する。詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取り組み
- ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
- ③ SV からの種々の情報
- ④ SV 記載の成績表・所見
- ⑤ 症例報告書
- ⑥ 実習日誌
- ⑦ 出席状況
- ⑧ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
- ⑨ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑨を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。

Ⅰ期臨床実習、Ⅱ期臨床実習で明らかになった自己の課題を解決すべく、しっかり準備をして臨むこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書 名：言語聴覚障害診断 ―小児編

著者名：大塚裕一、井崎基博

出版社：医学と看護社

■ 参考図書

■ 留 意 事 項

出席日数が規定の4 / 5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

新型コロナウイルス感染症対策や不測の事態（災害等）が発生した際、遠隔授業による授業運営に変更する
場合がある。また、新型コロナウイルス感染症の感染状況や入構禁止等の措置を講じた場合は、評価方
法を変更することがあり、評価方法を変更する場合には、講義支援システム（Moodle）を通じて周知する。

■ 講義受講にあたって